

## カレッジの歴史 (4)

シックス・フォーム・カレッジ

池田良三

## 目次

まえがき	二	直接補助学校	二三
一、シックス・フォーム・カレッジ	二	男女別学について	二四
1、六年級の起源	四	4、アトランティック・カレッジの創立と	二四
2、普通教育の完成—在学年数の延長—	四	「解放教科制」の教育課程	二八
3、六年級の「個人別教育課程」	七	1、シェフィールド市教育委員長の提案	二八
4、ドルトン実験室案	八	2、クロイドン市六年級の実態調査	二九
ホレウス・マーシャルの学習	九	3、クラウザー報告	二九
二、教育課程の改善	二二	4、総合制中等学校に関する通牒	三一
1、幼児学校の「プロジェクト学習」	二二	——歳余試験の廃止	三一
鳥の羽と飛行	二二	5、IQ信仰の崩壊	三二
2、下級学校 (男子校)	二四	メックスバラの「シックス・フォーム・カレッジ」	三二
全 (女子校)	二五	6、クイーン・メアリ・カレッジ	三四
3、マンチエスター・グラマー・スクール	二五	(1) 「解放教科制」教育課程の効果	三四
(直接補助学校)	二五	(2) 時間表の中の「教科」	三五
創立者オルダム	二五	(3) 時間の配分	三八
公費補助を受ける	二六	(4) 先任指導教師の任務と時間表	三八
教育行財政上の特典	二六	(5) 指導教師の任務と時間表	四〇
グラマー・スクールの教育課程	二七	(6) 六年級教育課程の事例研究	四二
課外活動	二七	ピーター (男子生徒)	四二
野外訓練・キャンプ・旅行	二七	ジャン (女子生徒)	四三
フレミング報告	二二		四五

注

## まえがき

イギリスでは「六年級カレッジ」の新設を急いでいる。「六年級とは私立中等学校の最上級のことである。現在この「六年級」に三年間在学させている。生徒はこの三年間に三教科のみを選択し、一教科毎に「個人別教育課程」を作成し、次のGCEのAレベル(高等試験)目標に学習している。公立グラマースクールも私立中等学校と同じ方法をとっている。

所が最近総合制中等学校やモダンスクールの在學生の中から、六年級に残りたいとい希望者が急増している。そこで地方教育当局は六年級生徒だけを入学させる学校、即「六年級カレッジ」を増設し、希望者全員の受入れをはかっている。これは教育当局側からの高等学校全入促進運動である。

「六年級カレッジ」側では入学希望者の個人調査を半年も前から開始し、綿密な時間割を作成している。その方針は「解放教科制」をとっている。入学した生徒は各自の将来の希望に応じ、必要な教科を選択して履習する。その学習の目標は五年級までに必要なGCEのOレベル(普通試験)をとった者は選択した教科のAレベル、とれなかった者はOレベル、又はCSEを目標にする者、或は試験のない教科の学習、その外レクレーション、スポーツに関する課目等である。これらの教科と課目の履習に当ってはバランスがとれるよう、即特定の方

向のみに偏しないよう、教師の指導は徹底している。筆者はこのような教育課程を「解放教科制」の教育課程と呼んでいるが、勿論これは仮称である。

このようにして新設される「六年級カレッジ」は一体どのように経営されているであろうか。これが本稿の中心課題であるが、ここに至るまでにはイギリスの教師たちの教育的信念による永い年月にいたる努力があったことを忘れてはならない。昔は、六年級に一年間在学していたにちがいない。在学期間はいつ頃、どんな理由で、三年間に延長されたのか。三教科のみを生徒個人の選択に一任するようになったのはいつ頃のことか、どのような教育思想に支持されているのか。三教科選択は教科として偏在する傾向はないか、人間教育としてどのような修正が考えられ、実行されているであろうか。われから考えるならば教育行政上、或は教育財政上幾多の問題があると思われる。入学年令は一六歳である。彼等は学校経営上どのような姿のカレッジを考えているのか、本稿でいくらかでも明らかにできるならば幸である。

### 一、シックス・フォーム・カレッジ

イギリスでは中等学校の五年級(義務教育終了の年、「一六歳」を終ると大部分の者が就職していたのに、最近では「六年級」に残りたい希望者が急増している。これは生徒が何らかの資格をとって有利な職業につきたいという希望があり、社会一般の就職年令も従来の一六歳から次第に高まっている為でもある。第1表は二〇年間の六年級に在学する生徒数と、同年令の者の中に占める%を示している。一七歳(

第1表

6年級の生徒数と同年令者中に占める%

年 令	1950	%	1960	%	1970	%
17	37,300	6.6	67,000	11.1	129,500	19.6
18	11,900	2.1	19,900	3.7	42,000	6.3
19	1,500	0.3	2,300	0.4	3,700	0.5

注: P. H. T Taylor: The English Sixth Form. 1974, P. 17

第2表

学 校 数 と 6 年 級 生 徒 数

(1971年1月)

	A	B	$\frac{B}{A}$	C		D
	学校数	Aレベルをもつ学校数		Aレベル課程に いる生徒数	$\frac{C}{D}$	16歳以上の 総生徒数
モダンスクール	2,464	430	17.4%	5,700	36.5%	15,600
グラマースクール	970	964	99.3%	114,800	95.8%	119,800
コンプリヘンジブスクール 総合制中等学校	1,373	866	63.0%	68,900	79.0%	87,200
その他の公立学校	341	239	64.2%	14,100	76.2%	18,500
私立直接補助学校	176	176	100.0%	24,200	85.5%	28,300
私立独立学校	676	548	84.0%	35,100	79.7%	44,000
合 計	6,000	3,223		262,800	83.8%	313,400

六年級の一年生)の者は、一九五〇年六・六%、一九七〇年一九・六%、三倍となつてゐる。一八歳の者も三倍である。一九歳になると極端に少くなつてゐる。多くの者は二年の終りに自分の能力の学校又はその他の場所に就職してゐる。この一九歳の生徒は最も優秀で、GCEのAレベルの最高をとり、オックスフォード又はケンブリッジの各カレッジを希望してゐる者か、又は研究所等を希望してゐる生徒であらう。次の第2表は各種の中等学校とその総数、その中のGCEのAレベルを目標に学習してゐる生徒のいる学校数、Aレベルの生徒数、その生徒数と一六歳以上の総数の何%に当るのか、それらを詳細に調査した統計である。この中の独立学校とグラマースクールでは、在学生の八〇%と九五%がAレベルを目標に学習してゐるので、一応問題はないと考えてよいであらう。モダンスクールの一五、六〇〇名と、総合制中等学校の八七、二〇〇名の合計一〇二、八〇〇名の中の、Aレベル目標に学習してゐる七四、六〇〇名も一応問題なく学習してゐると考えてよいであらう。残り二八、二〇〇名の指導が残された課題である。

この残された生徒たちの希望は、

(1) GCEのOレベル又はCSEを目標としてゐる者

(2) Oレベルが順調にとれるならば、さらにAレベルを一教科でもとりたい者

(3) 試験はないが社会に出て必要となる教科を学習し就職に役立てたい者

(4) レクリエーション、スポーツに関する課目もとりたい者

等その希望は多様であらうと想像される。これらの生徒たちにどのよ

うな教育課程を用意したらよいであろうか。

急増する六年級生徒を収容するために、独立した「シックス・フォーム・カレッジ」(学生数平均六〇〇名程度のカレッジ)の創立がすすめられている。(一九七七年現在七九校)これらの学校では「解放教科制」の教育課程を用意し、イギリス流のティーム・ティーティングで指導している。そこにたどりつくまでに、六年級の起源、在学年限の延長、六年級の個人別教育課程の採用等について述べておく必要がある。

## 1、六年級の起源

六年級という名称はイギリスの最も古い創立のウインチェスター機(ウイリアム僧正が一三九四年私費で創立した学校、この学校を手本として創立されたイトン校(ヘンリー六世が一四四〇年創立した学校)等の、学校編成に由来している。ウインチェスター校の学年編成は最初七学年制であった。一・二・三年級を助教師が担当し、四・五・六・七年級を教頭が担当していた。生徒総数は奨学生(授業料寮費全部無料)のみ七〇名であった。マリム教頭(一五五六―一六三三在職)時代の記録として、「六年級と七年級ではシーザー(一〇〇―四四B・C)ローマの将軍政治家)のガリア戦記、シセロ(一〇六―四三B・C)ローマの政治家雄弁家)等の著作を教科書として使用していると述べている。<sup>(注3)</sup>

所がウインチェスター校では七年級が一六四七年までになくなり、下学年の一・二・三年級も切り離され、準備学校(現在の私立準備学

校に当る)に移された。イトン校にあっても一六七八年までにウインチェスター校と同じ制度となった。<sup>(注4)</sup>

ハロー校(ハローの自営農民ジョン・ライアンが一五七二年私費で創立した学校)の学年編成では、最上級は五年級であった。イトン校出身のヒース校長(一七七―一八五在職)が赴任した時、彼は学生の就任拒否事件にあった。そこで彼は管理委員会の許可を得て新たに六年級をつくり、これらの生徒を監督生徒の地位につけ生徒指導を強化した。<sup>(注5)</sup>

以上のように六年級は、中等学校の最上級で必ず校長が担当し、監督生徒という特別な任務をもつ、特別な学級である。この意味をもつ六年級の名称はそのまま使用され現在に至っている。

## 2、普通教育の完成―在学年数の延長

六年級生徒の在学期間を明瞭に示してくれる最も古い資料は、クラレンドン報告書(イギリス議会は一八六〇年パブリックスクール九校の学校調査を実施した。報告はクラレンドン委員長名で一八六四年発表された)に収録されている各学校の生徒名簿である。ここにラグビー校六年級生徒名簿(一八六一年―二月現在、四二名)の一部を示すと第3表の通りである。当時の学年編成は第4表の通りである。(テンプル校長はこの六年級の学級担任で古典の教材を全部教え、生徒の個人指導では校長と、校長付助教師が別に二名いて、三名で指導している。この外に生徒全員に別に「個人指導教師」がついて個人指導をしている。この外にフランス語、ドイツ語と、数学にはそれぞれ専門

の教師が教えていた。

一番生徒は一八五八年二月、アツパー・ミドル、1級に入学し、六年級に入る一八六〇年二月までの二年間に五年下級、五年級、二〇名学級の四学級進んでいる。そして六年級に入った時から現在（一八六一年一月）までに既に一年一〇か月在学している。この生徒は翌年の新学期大学に進むのであろう。そうすれば二年一〇か月前後在学することとなる（ハロー校の六年級生徒名簿は宮崎女子短大研究紀要第4号で発表している。それによると一番生徒は一八六一年一月現在で二年四か月在学している。翌年の新学期までには三年以上在学することとなる）。

では、在学期間を延長した目的は何であろうか。学年編成表で見らる通り最下学年は「三年級」で、この学級はラテン語の入門期を終り、ギリシア語をはじめる学年である。四年級から中間級を経て五年級に至る学年の時代、生徒達はラテン語とギリシア語を中心に教科書の訳読、暗誦、次は作詩、作文の課題、これを毎週繰返していた。

「イギリスにおける古典教育、一五〇〇—一九〇〇年」を書いたM・L・クラークは一九世最大の古典教師としてシュローズベリー校長サミュエル・パトラー（一七九八—一八三六在職、その後リチフィールド値正となる）と、ラグビー校長トーマス・アーノルド（一八二八—四二在職）をあげている。アーノルドについて彼は、アーノルド伝の著者A・P・スタンレーの、「パブリックスクールにおいて古代作家の作品の歴史的、政治的、哲学的価値に注意をむけたのは、彼が最初のイギリス人であった」という文章を引用している<sup>(注6)</sup>。

(A・P・スタンレー「一八一五—一八一八」)はラグビー校からオッ

第3表 ラグビー校6年級生徒名簿 (1861年12月現在)

	年 令	6年入級年月	ラグビー入校年月	入校当時の学級名	備 考
1	18.1	1860年2月	1858年2月	ミドル上の1級	
2	17.5	1860年2月	1858年8月	5 年 級	
3	18.0	1860年2月	1857年8月	ミドル上の1級	奨学生
4	18.8	全 上	1858年2月	5 年 2 級	
5	18.1	全 上	全 上	全 上	
以 下 略					

注：Report. vol. II., P. 366

6年級42名中、奨学生は7名である。

第4表 ラグビー校学年編成表 (1861年12月現在)

上 学 年 学 校	生 徒 数	中 学 年 学 校	生 徒 数	下 学 年 学 校	生 徒 数
6 年 級	43	シドル上の1級	38	レム—ブ上級	20
20 名 学 級	27	全 上	36	全 下級	22
5 年 級	35	シドル上の2級	34	4 年 級	15
5 年 下 級	34	全 上	32	3 年 級	7
全 上	32	シドル上の3級	29	2 年 級	2
		シドル下級	30		463
		全 上	27		

注：Report. vol. II. P. 397

ラグビー数区内からの月謝無料の奨学生は67名いる。

クスフォードのバリオール・カレッジに学び、一八三九年ユニバーシティ・カレッジの特別研究員となり学生に教えた。彼はすぐ聖職位を得た。その後学生指導教師となり、一八六三年ウエストミンスター本寺長となった。彼はアーノルドの急死にあい、直ちにアーノルド伝の編さんに着手し、一八四四年上・下二巻約八〇〇頁を発行した。彼はアーノルドの古典教育についての考え方を次のように紹介している。

アーノルド博士は最初から古典を研究することが知的教授の基礎となるべきであるという意見であった。「語学の勉強は若者の心に人間的精神（人間社会への洞察と他人への思いやりの精神）を形成する目的のために与えられているものと私は考えている」と述べている。

生徒たちは漸く六年級にたどりついた。ここは最後の仕上げの段階である。大部分の生徒は就職する。語学をやる目的を明瞭にする必要がある。「君はこの学校に本を読むために来たのではない。如何に読んだらよいか、その方法を勉強するために来たのだ」とさす。それ故彼が教えたことの大部分は、生徒たちの精神の成長の中に織りこまれていた。彼等の心に常に参考となり、彼等自身の意見を形成するための背景となっていた。もし生徒が間違つて答えたとしても、彼はその場ですぐ訂正することはしなかった。真の答えにたどりつくまで根気よく、ものの見方考え方について話し続けた。彼の目的は生徒たちを正しい位置に立たせることであつた。

教室での知的訓練を実行に移す場合は、寮内・校内における「監督生徒」としての勤務である。六年級生徒は生徒指導上の責任者の地位におかれ、下級生の指導者・保護者であると同時に、学校規則に違反した生徒がいる場合には笞の罰を与えうる権限も持っていた。下級生が

彼の笞を心服して受けるか否か。これが監督生徒のもつ人間的精神の試金石となる。

アーノルドはラグビー校長に就任した翌年（一八二九年）の三月、友人J・ロウにおくつた手紙の一節に、「私の最大の希望は私の生徒たちに、自分で自分を支配することができるよう教えることである」と述べているが、この目的を達すること、即学習指導、生徒指導の両面において、将来どの方面に進もうともその生活を開拓し得る基礎的訓練を目標にしていたことは間違いない。

アーノルドがラグビー校長に就任した一九世紀前半の時代は、時代の一大転換期にきていた。一八二五年労働組合が承認され、労働者保護のための工場法が公布されている。一八三二年には第一次選挙法改正案が通過し、一八三八年からはチャーチスト運動がはじまっている。これは急進主義の政治運動で、普通選挙の実施をねらい、人民憲章の通過を議会にせまっていた。

宗教界では一八二九年カトリック教徒解放法案が通過し、これから漸くカトリック教徒が大学に入学し学位をとることが許された。所が一八三三年オックスフォード運動がおこつた。（オックスフォード大学においてキープル、ニューマン教授等によって行なわれた宗教運動で、イギリス国教内にカトリック教主義を復興させようという運動である。アーノルドはこの運動に反対する「広教会派」に属し、先頭に立つて猛反対した。そのためロンドン大学教授への就任申出もことわっている。）

このような時代であつた。大学における学習内容も程度が高くなり、当然中等教育の年限を延長して学習内容を高める必要がある。また一

般社会の要求も多方面にわたり、同時に程度も高くなる。時代の動きに敏感な校長としては普通教育の完成をねらい、在学期間を次第に延長し、父母もまたこれを当然の措置としたにちがいない（生徒の入学・卒業等は学校規則で学校別に決定してよいことが、その学校に与えられた勅許状で許可されている）。

### 3、六年級の「個人別教育課程」

六年級ではGCEの三教科Aレベル通過を目標に、教科別に「個人別教育課程」で学習を進めているが、このような形態をとるようになったのはいつ頃のことか、またどのような教育思想に支持されているのであろうか。

ハロー校の第二二代校長フォード（一九一〇—二五在職）は、第一次世界大戦（一九一四—一七）の概要を知るにつけ、六年級の教育課程に新しい傾向、即生徒の創造的能力を引き出すような編成を工夫することを考えた。その一つの試みは専攻教科群別編成の採用である。生徒は古典、数学、現代外国語（フランス語・ドイツ語等）、歴史、自然科学の中から、主専攻教科と、いくつかの副専攻教科を学ばせる方法である。

このような時代に大きな刺激となったのは、アメリカのマサチューセッツ州、ドルトン市の高等学校で発表された。いわゆる「ドルトン・ラボラトリー・プラン」であった。この案が発表されると間もなく、ロンドンのソンダーソン夫人とその令嬢ベル・レニーが視察し、ベルは帰国後直ちに「ドルトン協会」を設立し、この案の紹介に努力した。

このドルトン案はまたたく間にイギリス中にひろがった。W・K・リチモンドは「一九四四年以後のイギリスの教育」の中で、「一九二〇年代にイギリスでは一五〇〇以上の学校がヘレン・パークストのドルトン・プランを採用していたが、本国のアメリカでは僅か二〇〇校しか採用していなかった」と述べている。

さて、この児童一人一人の能力を考慮して教育課程を編成する、いわゆる「児童中心の教育思想」はアメリカにおいて一日にして芽生えたものではない。リチモンドも述べているように、この教育思想の源流は少くとも三〇〇年はさかのぼらねばならぬとして、進歩的教育思想家の名をあげている。今その名をあげてみると、

J・A・コメニウス（一五九二—一六二〇）、一六五七年「大教授学」を發表

J・J・ルソー（一七一二—一七八七）、一七六二年「エミール」を發表

J・H・ペスタロッチ（一七四六—一八二七）、一八〇一年「ゲルト・ルートは如何にその子を教えるか」を發表

F・フレーベル（一七八二—一八六三）、一八二六年「人間の教育」を發表、一八四〇年幼稚園を開設

M・モンテッソーリ（一八七〇—一九五二）、イタリアの女医、一九

〇七年「児童の家」を開く

J・デューイ（一八五九—一九五二）、一九一六年「民主主義と教育」を發表

これらの人々の思想と事業については別の機会に述べることとし、ここではドルトン案の骨子だけを紹介しておきたい。

#### 4、ドルトン実験室案

##### ドルトン高等学校

ドルトン高等学校はニュー・イングランド地方でも古典（ラテン語ギリシア語）を重視する伝統をもっていた。ドルトンの町は製粉工業の中心地である。それ故生徒たちの日常生活と学校の教育課程の間に大きな食い違いがあった。生徒たちが初等教育を終って、さらに高等教育の必要を感じている者には高等学校教育が必要なのに、入学者が少いのはどんな理由からか。大学入学準備として必要な課程を用意している高等学校の教育課程は彼等にとって魅力がないと思われる。

校長ジャックマン氏はこの現状をよく見ていた。ニュー・イングランドの事情や、保守的な学校委員会の態度から、高等学校は大学や特殊学校における真の職業教育への踏み台であるということを知らせることは困難であった。工場町に住む若い人々は古典語の準備教育のみに四年間も過す教育がいやであった。毎年一年生の教室は満員となるのに、四年後卒業する者は、裕福な家庭の生徒か、学問的に野心に燃えた生徒のみであった。しかし校長はこの教育課程をかえることは出来なかった。

所がパーカスト女史（一八八七—一九五九）の新しい教育方式を研究するに及んで、この方法の教育的価値が高いことを発見した。彼は女史の方法をこの学校に採用することを願ひ出て、管理委員会の許可を得ることに成功した。この学習方法の説明会が父母や生徒にむけてなされた。説明会は一九一九年の夏から秋までであった。

##### パーカスト女史が示した回章

##### 実験室の意味

実験室とは青年男女が自分のもつ本来の能力を見つけたし、自分たちが生活しているこの社会が必要とする知識の精ずいゝを、自分で経験しながら獲得していく。学問上の仕事場のことである。

この案では高等学校の教育を単純化し、経済的に再編成している。ここでは教師も生徒もよく活動できる。この案では教師と生徒にとつて非能率的なものは最小限にされる。従来の教育課程にさらにあるものを加えたり、或は変更を加えたりするものではない。また高価な精巧な機械類に頼るのでもない。この教育法では優秀な生徒にも劣等生徒にも同様に進歩の機会を与えてくれる。

##### この案の重要性

(A) この実験は高等学校の当面の問題の解決となり、有用な市民性の基礎を培うことができる。

(B) 実地授業によつて考えるのに、この教育法はその目標を学問的完成におくよりも、市民として重要な人格の完成に重点をおく、教育の健全な主張によつて動かされている。

(C) 人間の発達のための社会的実験室として奉仕する経験である。即ちここでは少年少女が必要とすることが学習されている。

##### 授業時間

午前八・四〇から午後三・一五まで、八・四〇—一・五〇までは実験室での自由な学習時間

午後一・一五—三・一五までは所定の学級での授業時間である。



## 学習の目的

生徒の一人一人が与えられた教育課程を学習しながら進むこと、子どもたちに勉強の仕方を教えることである。生徒が自分で主導権を握り、興味をもち、一人一人で工夫し、創造的狀態をつくりだすこと、一人一人の生徒が自分で選んだ教材を彼の能力が許す限りの全速力で進歩できるよう許してやることである。どこまでも自学自習がその目的である。

## 教材の割当

学校の一年は一〇か月とする。一教科の一年間の割当は一〇に分割される。生徒が入学したらその段階に応じ、教科一覧表が渡される。このカードは学年毎に色がちがっている。一年は青色、二年は黄色とこのように。

このカードには四つの基礎教科の最初の月の割当が印刷してある（数学、英語、歴史その他の教科）。

どの割当も四週に区切られる。生徒は一か月の割当をもらい、四週にわけ、さらに週五日にわけける。生徒は一教科に集中して完成し、テストを受ける。或は各教科を平行して学習し一度にテストを受ける。生徒は毎日の進度を記入する。

## 午後の時間

主要教科以外の教科は各学年のきめられた時間割で実施される。午後の時間はこれらの教科にあてられる。<sup>(注12)</sup>

## ホレース・マーシャルの学習

彼はドルトン市立〇〇小学校の五年生である。小学校の授業は午前

八・四五に始まり、午後四・〇〇に終る。朝は学級担任教師の実験室で集会がある。それが終ると、一二時までは自由学習の時間である。

学校の一年は一〇か月である。ホレースは五つの主要教科、即歴史、数学、地理、英文学、理科等の割当仕事、一か月分づつをもらっている。彼はこれらの教科を彼の割当表に記入し、四つに割り（四週間分とする）、さらに五つに割る（一週五日制である）。こうして作成されたものが第5表の個人別の割当表である。この用紙は色がつけてある。この色で学年がすぐわかるようにしてある。彼はこの主要五教科の外に、特別教科として体育、工作、美術等をとっている。

彼は今日勉強したいと考えていた教科の実験室で、午前中学習を続ける。実験室には教科書、辞典類、参考書、図鑑、実験用具、その他の備品が整備されている。実験室には必ず専門の教師がいて、生徒の指導に当たっている。ホレースは予定した教科の勉強を自分の速度で学習することができる。

実験室を出る前にホレースは彼の個人用割当表に、今日学習した所を記入し、次に実験室に用意されている、教師用の教科別進度表（第6表）にも記入する。これは生徒の個人別の進度を示してくれる。

一二時から三〇分間は生徒の各種委員会があり、一二・三〇―一三・〇〇までは学習グループの相談の時間にあてられている。一三時から一時間は昼食のための休憩時間となる。

午後の時間ホレースは彼の学級の生徒と一緒に特別教科（美術・工作・体育等）の授業に参加する。又は同僚や年長の者と共同製作等に参加することもある。

この学校には時間割はなく、また号鐘もない。ただ朝と昼と夕方の

終りの時間を知らせるのみである。

実験室には先にあげた教科別進度表の外に、個人別成績表（第7表）がある。これは生徒が記入し、教師用の記録である。氏名は一番下に書かれ、二〇に分割されている。教師が満足すべき成績で終った日を記入する。学習が一五日で終ったら、最初のらんに15と書き、次に5と書く。予定より5日早く仕上げることできたという記録となる。もし二三日かかったら、第一のらんに23と書き、第三のらんに3と書く。予定より三日余計かかったことを示している。この記録から教師はこの教材が生徒にとって、困難であったか、容易であったかを知り、次の割当の資料とする。

（以上はE・デューイが一九二一年一月二日ニューヨークで書いた「ドルトン・実験室案」<sup>〔注13〕</sup>によって紹介した。）

第5表

割 当 表

氏 名 住 所	年 令 学 年	開始月日	終了月日			
第 4 週						
第 3 週						
第 2 週						
第 1 週						
教 科	数 学 テ ス ト	文 法 テ ス ト	読 本 テ ス ト	地 理 テ ス ト	歴 史 テ ス ト	作 文 テ ス ト

注：E. Dewey : The Dalton Laboratory Plan.  
1922. P. 28

第6表

## 教科別進度表

## 地理科第3割当

		第1週					第2週					第3週					第4週					
氏	名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
A																						
B																						
C																						
D																						
E																						

注：E. Dewey: Ibid. P. 31

第7表

## 個人別成績表

	終了 日	節約した 日数	失った 日数	終了 日	節約した 日数	失った 日数	終了 日	節約した 日数	失った 日数	終了 日	節約した 日数	失った 日数	終了 日	節約した 日数	失った 日数
20															
19															
18															
17															
16															
15															
14															
13															
12															
11															
10															
9															
8															
7															
6															
5															
4															
3															
2															
1															

氏名 氏名 氏名 氏名 氏名

注：E. Dewey: Ibid. P. 35

## 二、教育課程の改善

### 1、幼児学校の「プロジェクト学習」

バーミンガム（イギリス中部の大都市）のボーデスレ教育カレッジに勤務している英語の講師、アイリーン・M・ハーギット女史は「初等学校におけるプロジェクト」という小冊子<sup>(注14)</sup>を書いている。女史は教育実習担当教師としてこの小冊子を書いてゐる。この小冊子の序文で女史は、

「この本の中でプロジェクトは実際に発展させるものとして書かれている。教師は学級内の子ども一人一人の能力を知っている。何かを見つけて研究しようとしている子どもは、彼が何を知っているか、何を知ろうとしているか、何を学ぼうとしているのかを示している。そこから教師は個々の教授に踏みこむことができる。或は学級一緒にプロジェクトの仕事の追加に入ることができる。」

プロジェクト学習では確かな手法を学ばせることができるし、子どもたちはこの頃この手法の教授を受けいれやすい。池に落された小石から円い波紋が広がるように、ある段階で導入された着想<sup>アイディア</sup>（思いつき）は、その後の段階で広がり、さらに次の段階で広がって行くものである。プロジェクトは一つの『思いつき』から自然に生ずる仕事の広がりである」と述べている。

例えば「樹木」という主題を設けたとする。そうするとおおよそ次のような流れができるであろう。

樹木―葉―幹―影―高さ。この準備された計画から次のような適当な記録で発表することができる。

葉―葉（集合的な葉）―葉の形の印刷（美術）―形をとる（美術と数学に關係する）―葉の成長（自然研究）―腐敗（土壌の研究）。

木の幹―樹皮（拓本―手わざ）―樹木の高さと幹の胴まわりの寸法

（数学）―成長（自然研究）―幹の中に生活している動物（自然研究）。これはさらに、影について、高さについて発展させることができる。

「すべてプロジェクト学習では言葉（話しことばと書きことば）を使用して、お互の考えかた、本のこと、場所や設備のことを話しあい、或は報告をまとめたり、適当に記録しながら、学習と実践が連続して行なわれている。プロジェクト学習の重点は、新しいものを見つけたし、見つけたしたものを記録し、自分で得た経験を発表する学習におかれている」と、女史のプロジェクト学習に対する考え方を述べている。

次にわれらにも理解し易い。五、鳥の羽と飛行を紹介したい。参考のため全主題名を掲げておく。1、牛乳配達夫、2、コンテナ―3、乳牛と牛乳 4、家 5、鳥の羽と飛行 6、クリスマス・ブディング 7、石 8、手（以上幼児学校用） 9、時間 10、レッド・インディアン 11、気候地帯 12、ノルマンディ公の英国征服 13、文学 14、機会 15、新聞 16、村落（以上下級学校用）<sup>(注15)</sup>

#### 鳥の羽と飛行

このプロジェクトは五歳児学級で取扱う。この学級は普通は教師を取りまいて学習しているが、作業（手仕事）をするときは小グループプ

にわかれる。

メアリーが一枚の鳥の羽を持ってきた。教師は子どもたちに、鳥の羽のことを調べるために、いろいろの鳥の羽を集めることを提案した。持ってきた羽を入れるために、次の三つのはり紙をつけた箱が用意された。

- 1、堅い羽
- 2、柔かい羽
- 3、その中間の羽

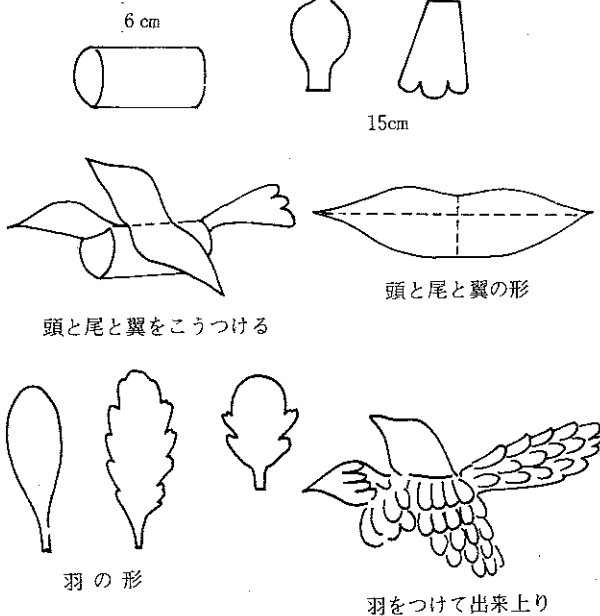
**第一日** 教師は「堅い (Stiff)」「柔かい (Soft)」「羽 (Feathers)」の三語をフラッシュ・カード (厚紙に文字を大きく書いたカード、厚紙の長さは五〇cm、幅二〇cm) にして用意しておく。このフラッシュ・カードによる文字の指導は、毎日一〇分以上をあて、いる (この三語をソーンダイクの重要単語統計表で見ると、それぞれ 2 b、1 a、2 a となっている。これは頻度数を示し、1 a は五〇語以内、2 b は二、〇〇語以内を示している)。

集めた羽は学校に持ちこまれ、外見によって別々の箱に入れられる。そこで教師は柔かい、堅い、中間のと分けた理由を話し合い、それらの羽が翼のどの部分に配列されているかを話し合う。羽の分類は次のようになる。

- 1、飛行用の羽
- 2、綿毛  
コバト
- 3、両覆羽

**第二日** 話し合いで四つの作業グループに分け、次の仕事を与える。どのグループも色や大きさを分類された羽の箱を持っている。

第8表



注: E. M. Haggitt: Projects in the  
Primary School, 1975, P. 32

1 群 用紙にいろいろな形の羽を描く。  
2 群 用紙から羽の形を切りとり、色を塗り、紙製の鳥をつくる用意をする。  
3 群 厚紙で鳥の形をつくったものに、切り抜いた羽をあしらってコラージュ (構成作品) をつくり上げる。教師は羽をくつつけたりする間に、鳥の羽の形とその任務について強調する。この会話の中に羽 (Feather) の集合体をあらわす羽 (Plumage) や両覆羽 (Covert) という言葉が自然に使用される (この二語はソーンダイクの二万語 (20 b) 以内には入っていない)。(第8表の図を参照されたい)

4群、出来上った鳥に彩色を施す。

作業が終ったら成績品を壁ぎわに展示する。教師は一つ一つ出来ばえをほめ、子どもの発表を聞き、作品について短文を書かせ、それと一緒に展示する。

第三日、朝よく晴れている。子ども達は全員外へ出る。いろいろな遊びをはじめている。一部の子どもたちは校舎の屋根にとんでくる鳥を観察し、その形や数をノートにとっている。外の子どもたちは紙で鳥の形を切りとり、鳥の形の投げ矢をつくり、どれが一番とぶか、競争をしていた。この活動は教師に取り上げられた。子どもたちは地面にスタートの一線を引き、ここからいろいろの形をした鳥の投げ矢をとばしてみる。落ちた所に印をつける。子どもたちは誰のが一番で、どれだけとんだのか、知リたがっていた。

そこで教師は巨離の測り方を教えることとした。二〇糎尺を持ってきた。長さはこれで測るんですよとい、ながら、一番とんだジョンの投げ矢の分をはかってみる。二〇糎尺を一〇回と五センチメートル、即二米五糎だった。他のグループは教室から鳥類図鑑を持ちだし、運動場にとんでくる鳥の名を探していた。教師は子どもたちに飛び方をよく見なさいという。ある鳥は翼を上下して飛び、ある鳥は翼をひろげたまゝ、気流にのって舞っている。教師は注意する。翼はどんな形で飛んでいるか、よく見なさい。後に、遊びの時間に、翼を上下する飛び方と、翼を一杯ひろげて空中を舞う飛び方をやらせてみる。

教室には、雀、むくどり、黒鳥、つぐみ、鳥等の名前をつけた鳥の絵を展示しておく。これらの鳥が運動場に飛んでくる度にチェックさせる。鳥類図鑑とも引きあわせて、鳥の飛び方をくらべながら話させる。

絵をかせせる。教師はその絵に文章を書き、又子どもが書くのを加勢してやる。この絵はまとめて図書館におき、皆に見せることとする。フラッシュカードには鳥の名、飛行 (Flight)、とまり木 (Perch) 等の言葉が加えられる。

子どもたちは週二回体育館で音楽とリズムの時間がある。子どもたちはレコードにあわせ、いろいろな鳥の飛び方をまねて動きまわる。

教師は滑空する (Glide)、空中に浮ぶ (Float)、鳥が空から飛びか、る (Swooping) 等の言葉を自分の身体で表現してみせる。子どもたちは親鳥が巣立ちしたばかりのひな鳥に飛び方を教えている姿も見落してはいない。最後に教師は飛び方を勉強している子どもに「夏の鳥」という作品からの抜粋を読んで聞かせて全部を終った。

このプロジェクトを進めるための情報源として次のような、児童用、教師用参考書があげてある。鳥類、鳥の観察手帖、イギリスの鳥類等鳥に関する本、二七種類、飛行機に関するもの五種類、空気に関するもの、二種類、空中を飛ぶ動物、一種類、羽に関するもの一種類、鳥に関する小説九種類、同じく詩九種類、フィルム三種等である。<sup>(注16)</sup>

## 2、<sup>ジュニア・スクール</sup>下級学校の教育課程 (男子校)

ロンドンのオックスフォードガーデンに同名のジュニア・スクール男子校がある。この学校の階上には同名の女子校があり、別棟には幼児学校がある。生徒数は男子校は二七〇名、女子校は二四五名、幼児学校は二三〇名で、三校合計七四五名である。日本ならば三校を合併して、校長の給与を二名分節約する所であろうが、三校を分離したま

、で経営するのがイギリス流である。何をねらっているのか、以下の記述でわかるようである。

男子校の校長は男子で、生徒がよく校長室に出入するが、校長は一人一人を名前で呼んでいる。教師は男子四名女子四名、合計九名である。男教師の一人は六七歳の老人である。定年は六五歳であるが七〇歳までは勤めることができる。学校給食は希望者のみに与え、父母は半額を負担し、牛乳(約二〇〇cc)は無料である(昼食時間は一二・三〇―一四・〇〇まで)。

下級学校でも教育課程の編成は学校側に一任されている。どの教科を何時間教えるかなど法律上の規定はなく、ただ公立学校の宗教教育についてのみ法律上の規定がある。<sup>(注17)</sup>

学校は朝九・三〇に始まり、毎朝一五分間の宗教集会がある。職員生徒講堂に集まり、校長が講話をし、讃美歌を歌って終る。宗教の時間は二〇分間づつ週三回あり、学級担任が道徳的なことがらについて話している。イギリスの学校では今でも校長室に鞭<sup>むち</sup>が用意してある。教師の命令を聞かないものはこの鞭の罰を受けているが、それもめったにあるのではなく、一学期一回位という。

この学校の一週間の授業時間数は次の通りである。正味二五時間で、集会一時間半、宗教一時間、算数四時間半、英語六時間、歴史一時間半、美術一時間、手工一時間、体育一時間、音楽一時間、時事問題一時間である。

### ジュニア・スクール(女子校)

校長以下女教師六名で、生徒数は二四五名いる。週間授業時間数は合計二五時間で、英語四時間半、算数五時間半、針仕事一時間半、美術一時間半、体育二時間、歴史一時間、地理一時間、宗教二時間、音楽一時間である。<sup>(注18)</sup>

ジュニア・スクールには男子混合校もある。レッチワース下級混合校では男女同一時間割で実施しているが、二・三・四年で男子は工作(七〇分)、女子は裁縫(七〇分)としている。<sup>(注19)</sup>

### 3、マンチエスター・グラマー・スクール(直接補助学校)

#### 創立者オルダム僧正

ヒュー・オルダム(一五〇五―一八九、エクゼター僧正)はオックスフォードのコルプス・カレッジ(一五一六年創立)とブレイズノーズ、カレッジ(一五〇九年創立)の創立にも貢献したが、マンチエスターでも彼の私財を投じ、一五一五年このマンチエスター<sup>フリー・スクール</sup>無月謝学校を創立した。

彼は旧領主の所有であった水車を全部買いとり、これを学校維持財産として寄付した。水車は一か所は製粉工場で、もう一か所は縮充工場(毛織物の最後の工程で水につけ目をつける作業をする)であった。

その使用料収入は一二八二年の記録によると、製粉工場上下二つの年間収入は一七ポンド、六シリング、八ペンス、縮充用水車は、二六シリング、八ペンスであった。学校の管理はマンチェスター・カレッジ学寮長と、一二名の市民代表に一任され、教師の任命に当ってはコープス・クリステイ学寮長が推せんすることになっていた。

こうして永らく経営されてきた学校も、時代の流れと文明の利益の発達で、水車による収入はなくなり、経営に苦しむこととなった。

### 公費補助を受ける

D・G・ミラー（一九二四―四五在職）はアッピンカム・グラマー・スクール（レスター聖堂事務局長ジョンソンが一九八四年創立した無月謝学校）の寮教師から、当校長に着任した。四四歳であった。

彼は着任早々一日五時間制を六時間制（一時間は四五分）とし、自然科学の時間を倍にした。校舎移転改築の粗案は一九二七年作成され、一九三一年生徒数九五〇名として設計され、総工費二五万ポンド内旧校舎の処分と学校財産収入一六万ポンド、残り一〇万ポンドは寄付金によって完成された。生徒数は一九三九年一、二五〇名、一九四五年一、四六四名に急増した。

### 直接補助学校となる

一九四四年教育法で全国民に中等教育を授ける教育制度を採用し、公立小学校卒業生に私立中等学校の教育を受けさせる「ステークスカラー公費奨学生」制度が設けられた（フレミング報告参照されたい）。学校財産収入の少ないマンチェスター・グラマー・スクールはこの公費奨学生を受入れる

直接補助学校となった。

### 教育行・財政上の特典

直接補助学校と独立学校には公立学校にない自由がある。この学校の管理委員会は校長を任命するが、その他の学校運営上の諸問題は校長に一任している。即部下職員の任命、学年の編成、教育課程の決定等一任している。

それ故学校の隆替は全部校長の手腕にかかっている。公立学校は地方教育当局の態度次第である。最悪の場合校長は、或は学校そのものが、官僚的な支配に従属させられ、政治的取引の人質のように取扱われる。

文部省の補助（一九六四年）生徒全員につき一人当四五ポンド、六年級生徒一人当八四ポンドをさらに加算する（一九七二年度は五年以下一人当三二ポンド、六年級一人当一一六ポンド）

次に父母負担はその収入に應じ次の四段階になっている（年額）収入

四五〇ポンド	〇ポンド
六五〇ポンド	一八〃
一、〇〇〇〃	四六〃
一、五五〇〃	九一〃

尚公費負担と父母負担の割合の経過は第8表の通りである。

### マンチェスター・スクールの現況

#### 入学生徒の決定



管理委員会はその周辺の地方教育当局と協議の上志願者を受入れている。一九六四年の志願者は男子一、二〇〇名、年令は平均一〇歳六か月であった。

第一次（二月中旬）、第一の試験は英語と算術の標準化された試験（四〇分間）、第二の試験は作文（二〇分）、これは合否すれすれの者の判定に使用している。第一次で四五〇名残す。

第二次試験は春の学期（一月―三月）の終りに、英語と算術について実施し、合格者二一〇名を決定している。入学は九月である。

#### グラマー・スクールの教育課程

この学校の生徒は能力が高いので、下学年は四年級までとしている（総合制中等学校では五年級をおいている。一年級でラテン語をとらないA B組と、とるa b組（将来古典や歴史を主として勉強したい者）にわけている。第9表がそれである。今一Aの教育課程をたどっている。二Aは数学一時間増、学級活動一時間減のみ。三Aでは増がドイツ語（5）、物理（3）、化学（3）、歴史（1）、計一二時間。減が英（1）、地理（3）、一般科学（3）、工作（2）、美術（1）、音楽（1）、数学（1）、計一二時間。4 Aでは増、英語（1）、数学（1）、減では美術（1）、音楽（1）。以上のようにして、四年級のA B、a b cでは選択教科でわかれる組まで計算すると、合計八つの組にわかれることになる。このように学習した実績をもってG C Eの普通試験（Oレベル）を受ける。受験教科の数は受験者の希望によってちがってくる。この頃には六年級に進んで後の専攻教科は既に決定している。ということとは生涯教育の方向が決定しているということである。

第8表

マンチェスタースクールの学級財政 学校

	1931年	1964年
学 校 財 産 収 入	4,000ポンド(11.4%)	650ポンド (0.2%)
国 庫 補 助 金	10,000 (28.6%)	122,000 (51.3%)
月 謝 収 入		
父 母 負 担	17,000 (48.6%)	30,000 (12.6%)
公 費 奨 学 金	4,000 (11.4%)	85,000 (35.7%)
生 徒 数	1,419名	1,421名

注：J. A. Graham: The Manchester Grammar school 1965. P. 83

第9表 マンチエスター、グラマー、スクールの教育課程（1－4年級）（1964年）

	1AB	2AB	3A	3B	4A	B	C	1ab	2ab	3a	b	c	4a	b	c
神 学	1	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1	1
英 語	5	5	4	4	5	4		4	4	4	4	4	4	4	4
歴 史	3	3	4	3	4	4		2	2	3	4	4	4	4	4
地 理	3	3		● 5		● 5		2	2		4			5	● 2
フランス語	5	5	5	5	5	5		5	5	4	4		● 5	4	
ドイツ語			5	● 5	5	● 5									
ラテン語								5	5	5	5	5	5	5	5
ギリシア語										5			7		● 6
物 理			3	3	3	3				2	2	4			¾●
化 学			3	3	3	3				2	2	4			¾●
物理と化学													● 5	3	
一般科学	3	3						3	3						
体 育	1	1	1	1	1	2		1	1	1	1	1	1	1	1
競 技	2	2	2	2	2	2		2	2	2	2	2	2	2	2
工 作	2	2										2			2
美 術	2	2	1	1				2	2	1	1	1			
音 楽	2	2	1	1				2	2			1			
数 学	5	6	5	6	6	6		5	6	5	5	6	6	6	6
学級活動	1							1							
自由時間	1	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1	1

●印は選択教科

4 C学級では、ギリシア語6と科学4の合計10時間か又は地理2、科学8合計10時間の二つの選択にわかれる。

〔注〕 R. E. Gross: British Secondary Education, 1965, P, 153

## 六年級の教育課程

六年級には三年間在学し、この間三教科を選択し、専門教師の指導のもとに、教科別に「個人別教育課程」を作成した上で、学習をすすめる。三教科の決定は勿論大学に進んだ際の大学側が希望する教科である。マンチエスター校の六年級の専攻教科群は第10表の通りである。六年級生徒は現在五一六名となっている。

さて、四Aの生徒が行けない科は、ラテン語のある古典科と、歴史科のうちラテン語を含む分科の二つで、その他の科には何れにも行き得る基礎教科を修めている。特にドイツ語を含む現代科には優先的に進むことができることになる。このような指導が早くから行なわれていると思われる。

さて、以上のような教育課程の組み方は、教育課程として健全であろうか。片よりがあるのではないか。科学科の数学科では数学・物理・化学の三教科のみを三年間学習しているが、それでよいであろうか。ここにそれとは別に「一般教育課程」を加えるべきではないか、次にレクリエーション、スポーツ等をどのように加えるか、という問題が生れてくる。そのような点でもマンチエスター校では万善の工夫をこらしている。

### 一般教育課程

一週三六時間のうちGCEのAレベル三教科に三分の二の二四時間をあてる。残り一二時間を一般教育課程にあてることが妥当とされている。この一二時間のうち、一時間は神学、一時間は学級活動の時間とし、残り一〇時間が一般教育課程にあてられる時間となる。

第10表 6年級の専攻教科群 マンチエスターグラマースクール (1964年)

古典科 (ギリシア語、ラテン語、古代史) .....	34名
現代科 (フランス語、ドイツ語、英文学) .....	51名
数学科 (数学、第2数学、物理) .....	52名
歴史科 (歴史とラテン語、フランス語、英文学、地理の4科の中の2科) .....	162名
科学科 数学科 (数学、物理、化学) .....	145名
生物学のⅠ (生物、物理、化学)	
Ⅱ (2、3年化学、植物・動物をとる者) .....	72名

※ 1週34時間のうち、以上の主要3教科に24時間をあてる。残り12時間は「一般教育課程」にあてる。

注: R. Gross: British Secondary Education. 1965. PP 155-6

次に科学科の三年間の一般教育課程の運営について述べる。

六年三級（入学した一年級の名称）では英語（3）、現代歴史（2）、選択教科（4）とする。

六年二級）では英語（3）、選択（6）とする。

六年一級（三年級）では選択をへらし他の教科をとる。

選択教科のとりかたは、科学科と数学科の一年級生徒は、ドイツ語、ロシア語、金工の何れかに四時間をあてる。将来建築を志す者は美術に全部の時間をあてる。一般教育課程の選択は二つの対の教科、即四時間の場合は二時間づつ、六時間の場合は三時間づつ、二教科にわけ、二名の教師が受持ち、半年交代とすることになっている。以上のやり方は二年級になっても同じである。

一般教育課目の例としては、絵画と美学、経済学、生物学、悲劇、道徳哲学、叙事詩、人文地理学、音楽、文明論等である。

科学科以外の生徒でフランス語、ドイツ語、英文学、或は歴史、英文学、フランス語をとっている生徒は、ラテン語（4）、音楽と美術に一時又は二時間、宗教学に一時、その上週二時間を科学にあてる。科学というのは物理、化学、生物の中の二か年の過程である。物理学では彼等は運動学、原子力、核理論を学ぶであろう。化学では有機化学と重体化学を学ぶであろう。一年級では生物学者は細胞の構造と機能について解説した後で、人間に関する問題について証明することであろう。例えば人体生理の恒常性（身体内部の体温が恒常を保つよう調節されていること）、神経系統、ホルモンの活動等についてである。二年級では進化について学習し、次に現代の遺伝学とその応用について学習する。

美術科に属する一年級生徒の科学も週二時間実施する。ここでは重点是科学の方法論におき、その学問的な意味について教える。

#### マンチエスター校教育の成果

イギリスの少年にとつて古い大学の公開奨学金を獲得することは最大の名譽である。次にオックスフォードとケンブリッジの一九五六年から六年間の最高五校の獲得教を示す。

- (1) マンチエスター校（通学制）
  - (2) ウインチエスター校（全寮制）
  - (3) ダルウイチ校（通学制）
  - (4) セントポールズ校（通学制）
  - (5) ブラッドフォード校（通学制）
- 100 105 153 161 195

#### G・C・Eの成績

一九六一年の夏、六年級の二年生が学年末にG・C・EのAレベルを受験した。その成績は

三教科通過した者	73 %
二教科通過した者	20 %
一教科通過した者	4 %
全然とれなかった者	3 % <sup>(注)</sup>

#### 職員組織

職員八六名（体育・工作以外の教師は全員大学卒で、その中の三分の二はオックスフォード或はケンブリッジの卒業生である）。教師一人当生徒数は一七・一の割合である。教科別の教員数は古典（ラテン語ギ

ロシア語(九)現代科(英語、歴史、地理、フランス語、ドイツ語等)(二七)、数学(一二)科学(二〇)、美術(二)、音楽(二)、体育(二)、工作(二)。

### 学校生活

- (1) 学校の課業は午前九、二五に始まり、午後三、四五に終る。
- (2) 毎朝礼拝行事を実施し、校長は特定の問題について全校に話しかける。
- (3) 校内競技は学級単位に実施されている。学級担任は学級を持ちあがる場合が多い。また一、二、三年の間、特定の監督 生徒(六年級生徒)が学級につき、学級担任を助け世話をしている。

### 課外活動

午後三、五〇以後、演劇クラブ、真理討論クラブ等二七のクラブ、その他スポーツクラブ(ラグビー、フットボール、水泳クラブ等)がある。

### 野外訓練キャンプ

J・L・ペートン校長(一九〇三—二四在職)時代野外訓練、キャンプ、旅行が奨励され、その伝統が今も残っている。

- (1) 年少組の野外訓練、聖霊降臨節(五月上旬)後、二週間の休暇がある。この期間に年少組凡そ九〇名をつれてチェシア(マンチエスタ一の南の州)で野外訓練を実施し、ここでキャンプの手ほどきをする。

- (2) 山岳地帯の野外訓練、上級の冒険家たち凡そ一〇〇名は、湖沼地帯(イングリランドの北西部の湖沼の多い山岳地帯)にキャンプをし、

猛烈な登山訓練をする。

- (3) 旅行団、夏になると、二隊が旅行に出かける。一隊(凡そ四五名)はスコットランドの高地地方に出かける。一隊(凡そ四五名)はスイスのアルプス地方に出かける。この外ノルウェー、イタリー、ギリシア等への旅行がある。この旅行中はある時はキャンプをし、又はユース・ホステル等を利用する。

- (4) 二つの宿泊施設、以上の外にこの学校には二つの宿泊施設がある。

第一の施設はダービシアにある小屋で、汽車で一時間の場所があり、毎週使用できる。一クラスの一五—二五名位の一群が担任教師と、学級担当監督生徒と共に使用することができる。美術クラブはこの施設で週末スケッチ大会を開き、天文クラブは二台の望遠鏡を使用し、徹夜で観察することができる。

第二の施設(小屋)は湖沼地帯にある。ここは主として六年級に提供し、彼等は週末旅行の宿泊用とし、ここを本拠として登山や岩登りを実施している。

- (5) 少年団活動 少年団は校内に四隊あって、年間活動計画に従って活動している。これらの校外訓練は利点が多い。町の子どもは山地に連れだされて、田園を愛することを学んでいる。アルプスの高地に野営しながら、頼りになる人物であることを証明する者もいる。こんな機会に少年の真価がわかるが、これは教室では絶対見ることが出来ないものである。休暇で帰郷した大学生が、在校生の野外活動に指導者として参加しているのをよく見かける。

- (6) 社会奉仕活動 一九六一年社会奉仕団が結成された。この運動は上級生の間にひろがり、生徒の半分が加入している。奉仕活動とは盲

人宅を訪問して本を読んでもあげるとか、老人や病弱者のために買い物に行くとか、或は車いすを押す仕事などをさせている。

### ストーン教頭の反省

この学校の教育効果を見るには永い年月をかけた統計が必要である。この学校で七年間学び、次に大学に進み、学位をとり、社会に出て行くが、さてどんな活動をしているのか。前校長ジェームズ卿（一九四五―六一在職）は競争試験で入学者を決定しはじめた一九四六年から追跡調査の計画をすすめた。

一九四六年と一九四七年の入学者を、一四年後の一九六〇年と一九六一年に調査し、その回答率は七八%と六六%であった（%は年度の順である）。このうちGCEのAレベルを通過した者は、三教科六三%と七一%、二教科はどちらも八%。大学入学者は六三%と七一%、このうちオックスフォードとケンブリッジに入学した者は何れも四五%、学位をとれなかった者は何れも三%であった。卒業した者のうち第一級の成績をとった者一八%、第二級の成績をとった者四七%、合計六五%。

卒業後の経歴は知的職業についている者が圧倒的である。科学と技術方面三〇%、法律一〇%、教師一〇%と一七%、会計士八%、医師六%、銀行家五%と二%、商工業者五%と一〇%、残りは牧師、軍人、テレビ局員、保険業、歯科医、獣医、建設業などであった。その後の三年間の統計もこの二年間の統計と殆んど同じであった。

回答した人の三分の一から二分の一が体育活動に従事し、また多くの者が音楽、ドラマ等の文化活動に経続的な興味をもっている。

創立者ヒュー・オルダムはこの学校を「賢明であれ」をモットーに、信心深い性格と良き学問を推進するよう創立した。もしオルダムが二〇世紀におけるこの学校の現状を見られたら、満足されているのではないかと考えている。<sup>(注23)</sup>

### フレミング報告

全国民を公立中等学校に就学させるについては、古い歴史をもち国民大衆の羨望の的である「私立中等学校」<sup>パブリック・スクール</sup>との関係を、どのように調整したらよいかの問題が残る。この問題について一九四二年フレミング委員会が発足した。

その結論は、この計画に協力するパブリック・スクールを次のA、B、二種にわけた。

A、に属する学校は「直接補助学校」<sup>ダイレクト・グラント・スクール</sup>とする。これに属する学校は授業料を徴収しないこととする。徴収するにしても父母の収入とその要求を考慮し、減額するものとする。これらの学校に在学させる生徒数は、管理委員会と地方教育委員会が協議の上決定するものとし、これらの生徒数に応じ地方教育委員会は授業料、寮費及びその他の必要経費を管理委員会に支払うものとする。

B、はその他のパブリック、スクールに適用する。地方教育当局は公立小学校卒業生をパブリック、スクールに奨学生としておくろうとする場合、最初の二年間「直接補助初等学校」で準備教育（公立小学校は一一歳で卒業する、パブリック、スクールの入学年齢は一三歳である、この二年間に公立小学校の教科にないラテン語、高い程度の数

学を教える）を終り、その後正式に入学させる。入学させる生徒数は全生徒数の二五％以下とならないものとする。

このようにして出発した「直接補助学校」の第一号が、マンチェスター、グラマー、スクールである。次にBに属する協力校の代表として、イートン、カレッジとマーチャント、テラーズ、スクール等がある。<sup>〔注24〕</sup>あげることができる。

## 直接補助学校

直接補助学校制度はフレミング報告（一九四四年）によって設立されている。独立学校のうち学校財産収入が豊かでない学校が公費の補助を受け、その代償として全座席の二五％を公費奨学生（公立小学校の卒業生を地方教育当局がその学費を負担して私立中等学校におくる生徒）に提共する学校のことである。その学校数は第2表にある通り現在一七六校（一九七一年）である。そのうち男子校は八〇校、女子校は九四校、混合校は二校である。男女別学（男女別学については別項でのべる）である。次に在学生の学費負担状況を示すと次の通りである。

在学生総数	一〇一、六三四名
公費奨学生数	六〇、七三四名 六〇％
その他の奨学生数	一二、九八六名 一二％
父母負担生徒数	二七、九一六名 二八％
教師数は六、六七八名、内六五％は大学卒業生で、残りは教育カレ	

第 11 表

中等学校修了者の進路 中等学校修了者の進路 (1975—76年)

	グラマー・ スクール	総合制中等学校	直接補助学校	独立学校
卒業人員	23.820名	254.650名	8.050名	15.470名
大学（学位コース）	30.9 %	5.8%	45.2%	35.7%
教員養成カレッジ	1.4	0.5	0.9	0.5
その他の高等教育	14.7	8.0	17.1	22.7
就職	53.0	85.7	36.8	41.0
	100	100	100	100

注：上掲の種類の学校の男子のみの集計である。Department of Education and Science: Statistics of Education, School Leavers C S E and G C E, 1978, P, 5.

ッジその他の卒業生である。学校規模は四〇〇名から八〇〇名以内で、平均五七七名である（学校運営上最も理想とする学校規模に近い数である）。一学級の平均は二六、六名、教師一人当生徒数は一六、七名である（公立グラマー、スクールは一六、五名、私立中学校は一一、〇名である）。

直接補助学校への進学者は大学進学が目的である。従つて大学進学率は最も高い。第11表を参照されたい。次に公費奨学生に対する奨学金の支給は、その父母の負担能力によつてちがつている。（前著「イギリス教育の伝統と未来」第24表、第25表を参照されたい）。

#### 直接補助学校制度の廃止

イギリス政府は一九七五年三月、直接補助学校制度を廃止することを決定し、一九七六年九月以後公立中学校に切りかえるよう勧告している（一、九七九年五月保守党内閣となつて以後の措置についてはまだ聞いていない）。

#### 男女別学について

男女共学がよいという議論は、それが自然の姿だということからである。少年も少女も家族の中では一緒に過している。後になると彼等は一緒に働き、また結婚することになる。この男女が最初に生活し勉強する場所が学校である。健全な情操や社会関係は、幼少の頃から築かれた背景があつてこそよく育つといわれている。

イギリスの学校が男女別学となつてゐる理由は、歴史的な出来事で

あつて、パブリック、スクールの影響である。別学になると教師もまた別々にされる傾向となる。女子生徒は男教師に教えられることもないし、男子生徒は女教師に教えられることもなくなる。

男女共学に対する主な論点は男女生徒のちがひによる。彼等は生物学的に身体の構造がちがつている。彼等が抱くものに対する興味や抱負、期待など、比較にならぬほどちがつている。最も大事なことは、彼等の発達速度がちがつているということである。「少女は一三歳になると成熟し、落つきができ、感情的に愛情深くなる。これに反し少年はまだまだ始末におえない、いくじなしの固さが残つてゐる。彼等と同じ教室で教えることは、年令のちがつた二つの群を教えるようなものである。ほつておいたら生徒たちは同性の者同志で友人関係をつくることにならう」。

若者たちはいつも無口で扱いにくい、だが男女共学の学校ではこれらの欠点を取り除かれるということはない。若者たちはどこにしようとして途方にくれた態度で、ある時はけんか腰で、用心深く、氣むづかしい。最も大事なことは何れの学校（共学か別学か）に、おいて、若者たちはよりよく成長し発展するかということである。

#### 4、アトランティック、カレッジ

##### 学校創立の哲学的基礎

K、ハーン博士（一八九〇—）は共同の管理委員会をもつ、一連の「アトランティック・カレッジ」を、「大西洋」沿岸諸国に創立したいと考えたが、それは大西洋沿岸諸国を通じ青年たちが危険な情態



に陥っている、その救済は教育者と政治家にとつて緊急の課題であると考えたからである。その第一号がこのイギリスのアトランティック・カレッジである。

ハーンはベルリンに生れ、ドイツとイギリスで学び、学位を得た。彼は後に国際的にも名声の高い教育者となり、特に全体主義の強圧に對し徹底的に戦い、人間精神の解放に努力した。彼は最初ドイツのサレムに寮制の学校を經營していたが、ナチスの強圧を受け、遂に一九三三年ドイツを脱出し、イギリスに渡り、スコットランドに落ちついた。ここにゴルドンストーン校を創立した。この学校の最初の生徒の中にエジンバラ公（エリザベス女王の夫君）がおられた。チャールズ王子もこの学校の卒業生である。

ハーン博士は彼が經營した学校ではいつもその教育課程の中に、帆船と登山をとりいれている。彼は救援事業奉仕——沿岸警備、消防事業奉仕、山岳救助奉仕等の価値を重視した。彼は若者が国家の危急を救うために従軍するのと同じ価値を、これらの救助奉仕に認めているからである。彼が考えているこのアトランティック・カレッジでは、諸国から派遣された一六—一九歳の若者たちに、大学入学準備のために二カ年の教育を授けることが目的である。このカレッジで青年たちは研究し、冒険をし、また奉仕作業にも従事する。このような共通の経験を経て、彼等は共通の遺産を理解することを学ぶにちがいない。

アトランティック・カレッジ創立の意義は二つある。第一の目的は大西洋諸国間の社会的融和をはかることである。われらの故国は現在も分割されたままである。それにも拘らず今尚互にひきつける何かがある。われら国民のもつエネルギーや多方面にわたる能力は平和的に

統合されている。教育事業もこれらの創造的運動外に置き去りにされてはならない。商業的な理由からだけでも、教育は西洋諸国間の統合の中心とならなくてはならない。今日は仕事のためその家族と共に海外のヨーロッパ諸国に行った者は、その子どもを故国の大学に入学させる目的で、滞在する国の学校で教育することは不可能である。その理由は外国語教育が貧弱だからである。アトランティック・カレッジの課題はこの障害を取り除くことである。イギリスに滞在しているドイツ人の子どもたちに、ドイツの大学に入学できるドイツ語その他の準備教育をすることである。さらに政治的経済的統合の中核となることも大きな目的の中にいつている。

第二の目的はもっと根本的なことである。西ヨーロッパ諸国では物質文明が繁栄しているが、その結果一方では害毒を流す結果となっている。その中に若者たちの退歩がある。若者の本能的な冒険心の衰え、或は各個人が他の人々を互に助け合うというような同情心の衰えである。物質的に繁栄している社会においては、自己訓練、献身、勇気等の感情を奮起させる必要がある。個人的な利害をこえて共同社会への奉仕である。青少年は他人のために活動し、他人のために働くよう、激励される必要がある。この目的のためにわれらは救助奉仕——即、海岸救助、カヌーによる人命救助、岩場救助訓練を欠がさないことにしている。

#### アトランティック・カレッジの創立

一九五五年、イギリスのアトランティック・カレッジの管理委員会議長サー・L・ダーヴァル（当時NATO防衛大学長）はK・ハーン

博士と会い、將軍はこの二年間この大学で、各国からおくられてくる参謀將校や外交官が深く国民的偏見に染まっていることに驚いている。感じ易い青年時代に寮制の学校で勉強させたならば、互に理解させる機会を与えるのではないか。この歴史的会見から、アトランティック・カレッジを大西洋沿岸諸国に次々創立しようという着想が生れた。管理委員会が構成された。委員は広く各界の代表者、即科学者、オックスフォードとケンブリッジからの代表者、帝国化学協会議長等である。

イギリスのアトランティック・カレッジは一九五五年九月、ウエルズの南海岸セント・ドナーツ城に開校された。この城の買収費六万五千ポンドはフランス人アントニン・ベス氏の寄付である。彼の父はオックスフォードのセント・アントニー・カレッジの寄贈者であった。このカレッジの心臓部はエリザベス風の中庭で、風化した灰色の石造建築があり、一方は中世の城のがっちりした城壁になっている。アメリカの新聞王ハーストは、一九三〇年代この城の改造に二五万ポンドつぎこんだ。彼はこの学校が大きな学校として成長するよう、共用の建物を残してくれた。大理石の浴室やシャワー室は寝室や勉強室に改造された。さらに宴会用の広間は食堂となり、ダンス場は図書館となった。カレッジはさらに二〇〇エーカー（約三〇万坪）の土地を買入れた。ここにはテラス風の庭があり、海に向つてゆるやかな傾面をなし、プリストル湾におちこんでいる。

完成して後はこのカレッジに三〇〇名の寮生を収容し、一〇〇名はイギリス人とし、残りは各国から二〇名から三〇名の一群の生徒を入学させる。管理委員会は将来鉄のカーテンの向う側からも入学させた

いと考えている。このカレッジはあらゆる国民に門戸を開き、民族とか信条にはこだわらない。またいかなる政治的、国際的機関とも関係はなく、その他位は独立の管理機関に管理される独立の学校である。

生徒を満員にするための設備として、五つの寮と勉強室、教室と実験室が必要である。この仕事も着工された。すべてが完成するまでの資金は一〇〇万ポンドを見積もられ、委員会はイギリス国内だけで募金は六〇万ポンド以上に達していると報告している。

## 入 学

一九六二年九月、最初の入学生は五三名で、半分はイギリス国内から入学し、残りはブラジル、カナダ、デンマーク、フランス、ドイツ、ギリシャ、オランダ、アメリカ等の出身生徒であった。イギリス出身の生徒の比率は二五％に近づけることにしている。

生徒の学習はイギリスの大学入学準備と、外国からきている生徒は母国の大学、即ハーバード、ストックホルム、ソルボンヌ等への入学のための準備である。科学と数学は勿論のこと、外国語の学習を重視している。英語を話している生徒は別に二つの外国語を研究に、外国から来ている生徒は英語の外にもう一つの外国語を学習することになっている。言語教室では、以上の外国語教授に当つて全教師とその奥さんも共に、週二回はその教室に出かけて教えるよう任命されている。

## 教育課程

カレッジは二学期制をとっている。授業日は三七週間と、各学期の中間に一週間の探険週間をおいている。この探険週間はエジンバラ公

とトレヴェリアン（一八七六一一九六二、イギリスの歴史家）の奨学金計画にもとづいて実施している。前半は南ウエルズで山岳訓練を実施する。後半は社会的目的をもつもので、鉄工場か或は鉱山に出かけ、労働者の家族と一緒に生活する。ここでは少年少女の犯罪とか、考古学や芸術や宗教の問題にぶつかると思われる。

六年級の教育課定は前も述べたように、母国の大学入学準備である。イギリスではGCEのAレベルを目標とし、フランスではバツカローレア、ドイツではアビツールである。イギリスの生徒の場合現在六〇名しかないのに、彼等がとるAレベル三教科の組合せは二三通りとなる複雑さである。このような組合せが各国の生徒全部について考えられる。現在の教育課程は第12表の通りである。全生徒が母国語、第一、第二外国語、美術と音楽、神学をとる。文科を希望する者、理科を希望する者の二つにわかれる。

### 学校案内

国際主義というと牛乳か水かわからないぼんやりしたものが想像されるが、この学校ではその国の特色をもつ部屋と家具、図書室の備品も母国をしのべるよう用意している。生徒の入学年令は一六歳から一七歳半までとする。入学生徒は私的なものもあるが、多くは各国の教育当局が保証人となっている（イギリスの場合「公費奨学生」である）。月謝は年五五〇ポンド（一九六五年現在）であるが、父母が月謝負担能力がないという理由で入学が拒否されることはない。

この学校の生徒の社会的身分の範囲は大変広い。ウエルズからの最初の生徒は鉱山従業者の子弟で、スエーデンからの入学者第一号はス

第 12 表

アトランティック・カレッジの教育課程

(1965年)

教 科	時 間	数
母 国 語	4	
第 1 外 国 語	4	
第 2 外 国 語	2	
美 術 と 音 楽	2	
神 学	1	
	13	
	文 科	理 数 科
古典（ラテン語 とギリシア語）	}	3
地 理		
歴 史		
経 済 学		
数 学	2	}
物 理 と 化 学	2	
生 物 学	2	
	34	34

注; R. E. Gross: British Secondary Education, 1965. P. 519

エーデンに大邸宅をもつ男爵の息子であった。

アトランティック・カレッジは以上のようにグラマー・スクールの五年級（または四年級でも優秀な者）を終った者のみが入学してくるので、いわゆる「六年級カレッジ」である。しかし最初のものではない。ウエルベック・カレッジの方が少い古い。

（ウエルベック・カレッジは陸軍将校を養成する士官学校等に入学させるための準備学校として、「六年級」生徒を二カ年教育するため、一九五三年創立された学校である。）

「六年級カレッジ」は新設の学校である故まだ「学校色」はできていない。教授の方法としては一二名から一四名程度の生徒を、個人指導形式か研究グループ形式で進められている。個人的行動の自由も相当程度許され、週末は自由行動ができる。服装もそう堅苦しくはない。知的行動には美術、工作、音楽、劇、いろいろの協会を含んでいる。体育にはラグビー、サッカー、ホッケー、テニス、バスケットボール等をやっている。すべての生徒が走る、躍ぶ、投げる、泳ぐ、登る、帆走等の基礎訓練を受けている。

### 本校教育の真髄

以上が本校教育の骨組みである。この骨組みの肉と精神は何か。要約して述べることは困難である。しかしこの学校で学び、また危険な状態にあるものを救済することに失敗し、困難を感じた生徒たちは、真の国際主義と同情心の何であるかを学ぶことであろう。この心情は人間の生命と威厳を軽べつするような心をはねのけるであろう。

われらの今日の戦いは、協力して平和のうちに生活する道を発見す

ることである。平和を保つことは戦争に勝つことよりも大きなことである。高温による原子核融合の威力はわれら人類を同じように脅かしている。われらの国々は地理、歴史、言葉等によって分割されている。いつ大事件が起きかわからない。

現在の若者たちは自分の楽しみのためには、時間や金銭を惜しみなく使用しているが、国家社会のことには至っては無関心である。国家社会のために、或は危機に陥っている個人のために、敢然と身を挺して救済に当り得る人間を養成することが、当「アトランティック・カレッジ」の創立の目的である。<sup>〔注28〕</sup>

### 三、シックス・フォーム・カレッジの創立

#### 「解放教科制」の教育課程

#### 1、シェフィールド市教育委員長の提案

シェフィールド市（イングランドの北部、ヨークシア南部の都市鉄鋼工業の中心地人口およそ五〇万）教育委員長アレキサンダー卿は一九四三年、将来イギリスの教育を発展させる鍵は、「六年級」<sup>シックス・フォーム</sup>の充実であることを予想した。彼は市内のグラマー・スクール九校のうち、二校のみが高等試験の古典科（ラテン語ギリシア語）を受けさせると申し出ていることを指摘し、次の教育再編成に当っては「六年級」だけを適当な場所に集め、職員と施設を充実させるべきであると暗示した。しかしこの構想に耳を傾ける者はいなかった。<sup>〔注29〕</sup>

## 2、クロイドン市六年級の実態調査

クロイドン市（ロンドンの南東サリー州の都市人口およそ二五万）教育当局は一九五四年、市内のグラマー・スクールに在学する六年級生徒が選択している教科の実態調査を実施した。五つの学校の六年級生徒は総数二六九名、この中でGCEのAレベルを目標に学習している者は二三四名、六年級の一年生が選択する教科は第13表の通りである。これを見ると一教科について五名以上の生徒が選択している平均的な学級の大きさの学校は一校のみで、四名以下のものは全部で八二あった。ある学校ではラテン語、純粹数学、応用数学をとりたい者はたったの一人づつであった。教師は一週平均一八時間を担当することになっている。たった一人の生徒のために古典や数学の教師を雇うことは公立学校としては出来ない相談である。また調査結果はフランス語ラテン語以外の外国語を学びたい者が非常に少いこと、女子生徒で自然科学に関する教科を選ぶ者も驚くほど少いこともわかった。教育当局の結論としては、六年級生徒のために一つの独立した学校、即一六歳から一九歳までの生徒のために「ジュニア・カレッジ」を創立し、生徒数は最高三五〇名を収容するという構想である。<sup>(注30)</sup>しかしこの構想は直ちに発展するには至らなかった。

しかし、六年級の教育については次第に世論が高まってきた。一九五六年青少年教育を審議するクラウザー委員会が発足し、報告書は一九五九年と翌年の二回発表された。またクロイドン市教育当局の構想から一〇年後の一九六五年、総合制中等学校への再編成について政府通牒が発表された。次に以上二件の概要について述べる。

## 3、クラウザー報告

一九五六年三月、文部大臣は中央教育審議会に、一五歳から一八歳までの少年少女の教育について諮問し、委員長クラウザー卿は一九五九年と六〇年の二回にわたり、二冊（合計七五〇頁）の報告書を提出した。報告書の第五部で「六年級」の教育について述べている。

一九五八年現在、一五歳の少年少女の二六％に当る一五七、〇〇〇名が、直接補助学校、州立グラマー・スクール、テクニカル・スクール、独立学校（私立中等学校）に在学している。「総合制中等学校」に在学している者は九、〇〇〇名である。この生徒たちが一七歳になると、前者の六年級に五、二〇〇名、後者には一、三〇〇名が在学している。委員会はこの六年級生徒を増加させる方策を講ぜよという。

従来は一五歳でGCEを受験する自信のない者（一一歳試験で下位の者はモダーン・スクールに入学している）は、グラマー・スクールに入学すべきでないとされているが、委員会はこの意見に賛成していない。委員会は中等学校の教育課程を改善するよう勧告している（イギリスでは教育課程の編成は学校長に一任されている、学校規則で決めるよう一任されている）。<sup>(注31)</sup>五年級の時間割を見ると盛り沢山過ぎるのではない。ラテン語をとり、その上に外国語を別に二つも学習しているが、これは負担過重ではないか、改善すれば優秀な生徒は現在の下学年の五年間で終ることができると思われる。この方法はすぐ直接補助学校、独立学校に採用された。

六年級の実態調査は二つの教育的意義をもっている。

第一は、大学入学の最短巨離にることである。六年級では少数の

第 13 表

## 教 科 別 生 徒 数 一 覧

クロイドン市教育委員会

(1954年)

	セルハースト	ジョン、ラ	セルハースト	コ ロ マ	レディ、エド	1 年 生
	(男子校)	スキン(男子校)	(女子校)	(女子校)	リッジ(女子校)	合 計
物 理	29	8	6	—	—	43
化 学	26	6	9	1	1	43
植 物	9	—	—	6	1	16
動 物	12	1	—	7	1	21
生 物 学	—	—	9	—	1	10
地 質 学	3	—	—	—	—	3
純 粋 数 学	24	8	4	3	1	40
応 用 数 学	18	8	—	—	1	27
ラ テ ン 語	8	3	3	—	1	15
ギ リ シ ャ 語	1	—	—	—	—	1
フ ラ ン ス 語	8	4	7	—	3	22
ス ペ イ ン 語	3	—	—	—	—	3
ド イ ツ 語	3	—	—	2	—	5
英 語	4	6	11	7	5	33
歴 史	4	5	5	1	4	19
地 理	7	3	4	4	3	21
経 済 学	5	3	—	—	—	8
音 楽	—	—	2	—	—	2
美 術	—	—	3	—	2	5

注: E. Macfarlane: Sixth-Form Colleges, 1978, P. 219

教科（普通は三教科）を専攻し、GCEのAレベルを目標に学習している。教師生徒間は「知的徒弟」の關係にある。

第二に、最近では六年級でAレベルの一教科或は二教科を通過することが進学又は就職の条件になっている所がある。女子生徒のための教員養成所看護婦養成所がそれであるし、男子生徒の場合は銀行、保険、法律關係がそうである。これらの職業は従来一六歳で就職していたのに、現在は年令も一八歳に引上げられた上に、学力も高い程度が要求されている。それ故委員会は六年級への入学の条件について、六年級の教育課程の在り方について、さらに研究するべきことを要求している。六年級に残る生徒数については現在一二%に過ぎないが、将来は五〇%にまで高めるべきであると勧告している。<sup>〔注32〕</sup>

#### 4、総合制中等学校に関する通牒

政府は一九六五年一〇月、中等学校再編成につき次のような通牒を地方教育当局に発した。従来のグラマー・スクール、モダン・スクールの制度は、一一歳試験の成績によって決定していたが、この制度を廃止し、次に述べる種類の総合制中等学校の中から最も適当とされる制度を採用せよというのである。

- (1) 総合制中等学校（一一―一八歳）現在六〇の地方教育当局が採用している。生徒数は二〇〇名のものから大きいのはロンドンに二、〇〇〇名という学校もある。平均八〇三名である。<sup>〔注33〕</sup>
- (2) 総合制中等学校を下学年と上学年にわけける。前者を総合制中等学校（一一―一六歳）とし、その後を「シックス・フォーム・カレッジ」

（一六一―一九歳）とする。後者は希望者全員を入学させる「解放カレッジ」である。これをすぐ実行したのはヨークシアのメックスバラの「総合制シックス・フォーム・カレッジ」である。この「シックス・フォーム・カレッジ」はグラマー・スクールの「六年級」をそのまま吸収し、その上近くのモダン・スクールの「六年級」入学希望者を全員入学させている。六年級生徒だけを入学させた学校としては既にアトランチック・カレッジ（一九六二年創立）等があることは既に述べた。

- (3) 総合制のジュニア・スクールとシーニア・スクールとし、一三歳又は一四歳で上級に移す方法である。この方法では現在あるモダン・スクールをジュニアとし、グラマー・スクールをシーニアとすればよい。しかしモダン・スクールでGCEの準備をしているところでは歓迎されない。ジュニアの二年間ではあまりにも短かく、一四歳では〇レベル試験に接近し過ぎている（一五歳又は一六歳で受験する）。少くとも一年か二年準備期間がほしいという。

- (4) 三層の総合制中等学校

これは五一―九歳、九―一三歳、一三―一八歳の三段階としている。

現在の独立学校のやり方である。公立中等学校は一一―一二歳で入学させるのが原則である。<sup>〔注34〕</sup>

#### 一一歳余試験の廃止

I・Q（知能指数）信仰の崩壊  
一九四四年教育法以後「一一歳余試験」の成績によって、生徒たち

はその能力の順にグラマー・スクール、テクニカル・スクール、モダ  
ー・スクールに振り分けられていたが、それが失敗と見なされる事  
例が報告されている。

ロンドンでは一九四六―一九九年の間に、総合制中等学校のひな型のよ  
うな学校が八校創立されていた。これらの学校の中で一一歳余試験の  
正当性が打ちくだかれ、I・Q（知能指数）の恒常性も打ちくだかれ  
る結果となった。その例として、ジャン・スミスは知能指数は九六で  
能力的学級の最下級に入れられ、三年間元気がなかった。しかしその  
後生きかえった。彼女はGCEのOレベルを七教科とり、ラテン語は  
一年間の勉強でとり、その後教師になることができた。

他の教師のデーウィッド・ジョンズはI・Qが八〇で、地方のモダー  
ン・スクールからこの学校の四年級に入学してきた。その二年後にG  
CEのOレベル五教科をとり、その後英語、歴史、聖書、音楽を研究  
した。<sup>〔注35〕</sup>

ブリストルの例では総合制中等学校生徒の中で、一一歳余試験で失  
敗した一七名の生徒が、六年級でGCEのAレベルを受験し、二六科  
目を通して、その中の六名は大学に入学し、その中の一名はケンブリ  
ッジ大学に入学できるほど優秀であった。

## 一一歳余試験の廃止

労働党内閣は一九六五年一〇月通牒を発し、総合制中等学校への再  
編成を各地方教育当局にすすめ、一一歳余試験による三校への進学制  
度を廃止することを決定した。その後中等学校の再編成が急速に進行  
している。

同一学年の生徒数が多い場合、イギリスでは、ストリーミング（  
Streaming）法がとられている。生徒たちは同じような能力の者同志  
の間で最もその能力を伸ばすことができる。教師も殆んど同質の生徒  
を教える場合最も能率をあげることができる。教育課程も教科書もそ  
の能力にぴたりとなつて能率をあげることができる。

九〇名の生徒がいる場合三〇名づつの三学級に編成する。A（平均  
以上の）三〇名、B（平均の）三〇名、C（平均以下の）三〇名とい  
うわけ方である。<sup>〔注36〕</sup>

第14表は公立中等学校の再編成状況を示している。

## 五、メックスバラの

### 「シックス・フォーム・カレッジ」

メックスバラ（南ヨークシアの小都市）のグラマー・スクールでは  
一九六四年、次の要求を市教育当局に提出した。それは本校の一六歳  
以後の生徒のために「シックス・フォーム・カレッジ」を創立し、こ  
の学校の校長と職員を新たに任命してほしい、校長はクロイドン構想  
によつたが、学校の運営についてはクラウザー報告書の精神による、  
という案である。

六年級を独立したカレッジとして分離するには二つの理由があつた。

第一は、六年級生徒が急増し五年級以後残る生徒が七六％となつてい  
る。それ故優秀な生徒は四年級を終ると六年級に移っていた。六年級  
には現在三〇〇名の生徒がいる。生徒は伝統的なAレベルの三教科だ  
けを目標としている生徒のみではない。これはモダーン・スクールか



第 14 表

## 公立中等学校の再編成

	グラマー・ スクール	モダン・ スクール	テクニカル・ スクール	総合制中等学校
1960年	1,284	3,887	228	130
1974年	675	1,509	35	2,273

総合制中等学校数は1950年10校であった、グラマー・スクール675校の中に直接補助学校176校が含まれている。

注: W.K. Richmond : Education in Britain since 1944. 1978. PP94-5

らの入学者が多くなつたせいである。彼等は一歳試験で強制的にモ  
ダイン・スクールに入学させられた不満から、六年級に希望して入学  
している生徒たちで、彼等の中にはOレベルを目標にして学習してい  
る者が多い。第二に、六年級を希望する生徒が増加している。その大  
部分は能力が高く、一六歳になるのを待たず一五歳で入学してくる。  
それ故に学生が選択する教科の幅は非常に広い。在学している生徒を  
その希望によって分けると、

- (1) GCEのAレベルを目標としている者
- (2) Aレベル程度の教養課程を学習している者
- (3) いろいろの職業につく準備としての勉強をしている者
- (4) Oレベルを目標としている者

生徒たちの生活もすっかり変つた。生徒の一人は委員会を選び、さ  
らに細分化されて学生活動がすすめられる。大きな共同の部屋が用意  
され、昼間夜間の軽食堂が経営され、その隣に会議室が用意されてい  
る。制服はきめられているが、化粧や装身具の使用は自由で、髪型は  
きめられていない。古い軍隊式の食事作法はなくなり、大食堂で自由  
に選択して食事する方式になり、どのテーブルにしようが、誰と一緒に  
なるうが、それは一切構わない。これらのことはこの一〇年間に起  
つた意味のある傾向を示している。

この学校ではAレベル又はOレベルの教科の組合せを自由にとらせ  
ている。その結果文科系と科学系の教科の混合した組合せがあるし、  
マンチェスター校六年級の教科の組合せは物理、化学、生物というよ  
うに理科系、又は文科系の教科の組合せであった、また試験のある教  
科や職業的作業とは全然別箇に「一般教科研究」(general studies) (

例えば男生徒のために「入門者のための金工」女生徒のための「入門者のためのタイプライター学級」等の時間を設け、或は試験のない教科の勉強も一人一人の時間割に組みこむことも可能であった。<sup>〔注37〕</sup>

## 六、クイーン・メアリ・カレッジ

マックファーレン校長が抱く「シックス・フォーム・カレッジ」の構想について述べることにする。彼は教員養成カレッジを卒業後、ロンドン大学のバーベック・カレッジ（クエーカー教徒で医師であったジョージ・バーベック【一七七六—一八四一】は一八二三年ロンドンに機械工業研究所を創立した。一九二〇年ロンドン大学に移管された）<sup>〔注38〕</sup>に入学して英語を研究した。その後グラマー・スクールの校長をへて、一九七二年ベーシングストーク（イギリス南部のハントシアの小都市）のこの学校長に任命された。このカレッジは生徒六二七名（一九七六年夏）<sup>〔注39〕</sup>もいる、現在ある「シックス・フォーム・カレッジ七九校の中で最も大きいものの一つである」<sup>〔注40〕</sup>。

### (1) 「解放教科制」教育課程の効果

「シックス・フォームカレッジ」を設立する目的は、私立中等学校に進学出来ない青年男子又は女子を入学させ、その能力を最大限に伸ばし、大学に入学するか、或はよりよい職業に就職できる機会を与えるためである。このように入学生は多様の目的をもっているために、六年級カレッジでは「解放教科制」教育課程を採用している。この教育課程は生徒側からいえば彼が必要とする教科を選択して学習し、学

校側からは多数の生徒の要求を集計した上で、生徒が希望するどの教科の教室へでも出席可能なような時間割を用意することである。

下学年時代GCEのOレベルを五教科程度通過して後六年級に進むのが従来の例であるが、これらの優秀な生徒は六年級で三教科ともAレベルを順調に通過し、その後その生徒の目的とする大学又は研究所等に進むことができるであろう。しかしこれらは、全体の一五%から二〇%以下の限られた生徒たちであろう。（従来グラマー・スクールに進んだ生徒たち）。

しかし残りの多数の生徒たちは、良心的にこつこつ勉強していて後れた者、限られた能力しか与えられていない為にある教科についていけなかった者、或は試験になると必ずその能力を発揮できなかった者等、今迄「落ちこぼれ」てきた原因はいろいろあるにちがいない。そのような悪条件の生徒たちにも、学問の機会を与えようというのがこの「シックスフォーム・カレッジ」の幅広い「解放教科制」教育課程である。

さて、この教育課程を採用し実施した結果、従来の方法が如何に不経済で、また不公平であったか、それを証明する資料がある。それはザンプトン（ハンプシアの南部の海港、人口およそ二〇万）教育当局の報告である。一九六四年から一九六八年の間に、ザンプトンの中等学校の下学年から、「女子シックス・フォーム・カレッジ」に三五八名の生徒がおくられた。この中の一五三名（四二・七%）の成績はOレベル三教科がそれ以下の者であった。従来であれば当然六年級に進む能力はないとして、五年級を終るとすぐ一六歳で就職するよう強制される生徒たちであった。

この生徒たちが一年後Oレベルを二五八教科通過し（一人平均一、

六教科、さらに次の年三八〇教科通過した（平均二、五教科）。彼等がこのカレッジを去るまでに六三八教科通過したので、平均四、一教科となった。その上に四一名の少女はAレベルを一教科通過し、八名の者が、二教科通過し、一名は最大の三教科通過している。一部の少女は秘書などの資格をとった者もある。一五三名のうち六年級に一年在学した者三五名、二年在学した者一一一名、三年在学した者七名であった。これらの生徒たちは卒業後少くとも四二名は初等学校教員養成所に入學し、一名は大学に進み、二八名は看護婦養成所に入學している。もし一六歳で就職していたならば、このような将来が展開するなどと、誰が予想できたであろうか。<sup>〔注4〕</sup>

## (2) 時間表の中の「教科」

「解放教科制」の時間表は複雑である。同じ数学であってもAレベルとOレベルの数学の内容は全然程度がちがつているし、女子用はまたちがつている。それは六年級に在学している生徒の能力差が大きいためである。在学している生徒の学習内容を大別すると、

(A) GCEのAレベル三教科のみを希望する者

(B) Oレベルを希望する者

(C) (1)と(2)の複合を希望する者

(D) 試験のない「一般教養教科を希望する者」

シックス・フォーム・カレッジでは入學予定者について、入學後の希望を綿密に調査する。その役目は「<sup>シニア・チューター</sup>先任指導教師」が引きうけている（先任指導教師ジャン・ステイワートの項を参照されたい）。先任指導教師は一人一人の生徒の入學後学習を希望する教科とその程度、一

般教養教科（従来の教科にはないが社会生活に必要な教科、レクレーション、体育等について調査した上で、週教科時間表を作成する。

さて、公平な教育課程作成の原則については一九六四年発足した「教育課程と試験のための委員会」の答申がある。この委員会は一三年間GCEのAレベル方式に検討を加えた上で、六年級の学習は幅広い教科にわたるべきこと、教育課程を作成する上で欠くことの出来ない要素として次のような学問の分野をあげている。

A、言語による伝達能力

B、知識と理解能力

C、情操的能力

D、表現的能力

(1) 読んだり書いたりできる能力

(2) 数の計算能力

(3) 人間の自然的身体的環境に対する知識と理解能力

(4) 人間とその社会的環境に対する知識と理解能力

(5) 道徳的感情の発達

(6) 美的能力の発達

(7) 環境をつくりかえる能力（創造的な芸術と創造的な工学的予見）<sup>〔注4〕</sup>

(8) 広い意味の体育

以上あげた要素は同じ重さをもっているのではない。生徒の育った背景、生徒の目的が必要によつてちがつてくる。それ故生徒の時間割は一人一人ちがつてくる。しかしここにあげた要素の何れかをとおしたり、又はおろそかにしては均齊のとれた時間割とはいえない。六年級の時間表に出てくる教科は、

A、GCEのAレベルに属する教科

大学側の要求は支配的な影響をもっている。生徒は大学における専攻を従来通り、文科系、理科系等の三教科のみにしぼって学習をすすめる。しかしこのような方法のみが最良なのか。ある卒業生は次のような不平を述べている。「私は私が希望した通り生物・美術・英語をとることを許されなかった。そこで私は生物・化学・物理をとったが、このことを私は一生後悔している。」学校側が用意した理科の課程を強制されたためのなげきである。クイーン・メアリー・カレッジでは一九七七年Aレベルをとるため勉強している者六四五名のうち、一八五名は教養課程(文学・語学・哲学・歴史等の教科)と自然科学に関する教科の混合した教科をとっていたという。上述の生物・美術・英語というような教科の組合せを希望する生徒が相当数存在していることを示している。

B、GCEのOレベルに属する教科

モダン・スクールから入学した生徒は、将来の計画を考え、不足するOレベルの教科の学習を継続する。

C、一般教養教科 (general studies)

イギリスの六年級では新しい「一般教養教科」を設けている。一八歳で就職する生徒の多い「シックス・フォーム・カレッジ」の立場は、自らちがった観点即一般社会の要求を考える必要がある。現在の社会で成功するためには問題に対する適応能力と、問題解決のための知的能力が必要である。そのためにはこうすればよいという単なる知識では駄目である。自らぶつつかつてみて試行錯誤的な方法を繰返しながら、ある時は成功しある時は不成功に終るが、やがて

忍耐強い努力の後に成功するというような、経験・体験が重要な価値をもつ。人々は遠方に旅行しちがった背景のもとで生活している人々の姿に接し、いろいろの仕事の処理の仕方や経済的な方法に驚くことが多い。外国の社会の実情にあつた政治的・経済的機構や公害処理の方法、或は電気機械や器具等もその使用法を会得すると生活の改善に役立つことは人皆知っている所である。シックス・フォーム・カレッジでは最も新しい社会科学に関する問題、或は自然科学に関する問題、或は将来必ず予想されるような問題についても、準備しようとしている。これに「一般教養教科」という名称を与え、多くのテーマを用意している。

ハンプシアのブロッケンハースト・シックス・フォーム・カレッジ(一九六九年の創立)では、一般教養教科を「コア・スタディ」(中心となる教科研究)と呼んで重視している。このカレッジでは一般教養教科として七〇の教科、レクレーションに三〇の種目を用意している。その中の主なものは次の通りである。

a)	金工入門	宗教のいろいろ
	料理入門	中世の教会
	織りもの入門	ドイツ語入門
	やさしい縫いもの	科学と工業経済
	測量入門	その他(略)
	オーケストラ	合計 二二教科
b)	夕食づくり	ギターの構造

織物づくり

陶器づくり

チェス

科学と工業技術

冒険クラブ

教授とその方法

森林のプロジェクト」その他(略)

宝石みがき

合計 二七教科

6)

陶器づくり

疑問と返事

印刷術

写真

ギリシア劇場

金銭の管理

アメリカ研究

料理と食事

社会の中の掃人

その他(略)

工芸と環境学

合計 二二教科

d)

洋弓

カヌー

バスケットボール

セーリング

ゴルフ

柔道

ラグビー

オリエンテーリング

水泳

その他(略)

ダンス

合計 三〇種目<sup>(注43)</sup>

D)レクリエーションと体育の理論と実技

ブロッケンハーストでは一般教養教科にレクリエーションも体育も全部含めているが、一般教養教科を狭く解している学校では、D)を広くとっている。心身の健康を如何にして保持するか、生徒自らが自分なりの方法を工夫する時間である。

### (3)時間の配分

教育課程と試験のための委員会は、時間の配分について次のように提言している。主たる研究に一週三五時間のうち七分の五の二五時間を割りあてる。Aレベル三教科に平均八時間を割りあてることになる。三教科平均してやる場合である。残り一〇時間のうち、レクリエーションに二時間又は三時間あてる。七時間又は八時間を一般教養教科にあてる。そうすれば一般教養教科の場合一週二時間宛の教科は最大四教科とれることになる。一年間とる場合と、二年間連続してとる場合では熟練の度合いは相当ちがつてくると予想される。

### (4)先任指導教師の任務と時間表

ジャン・ステイワート女史は「シックス・フォーム・カレッジ」の「先任指導教師」(Senior Tutor)の一人である。この先任指導教師は一つのチーム(職員一二名と生徒一六五名で構成されている)の責任者で、小さい学校であれば校長の地位に当る。このカレッジの運営機構は第15表と第16表の通りである。

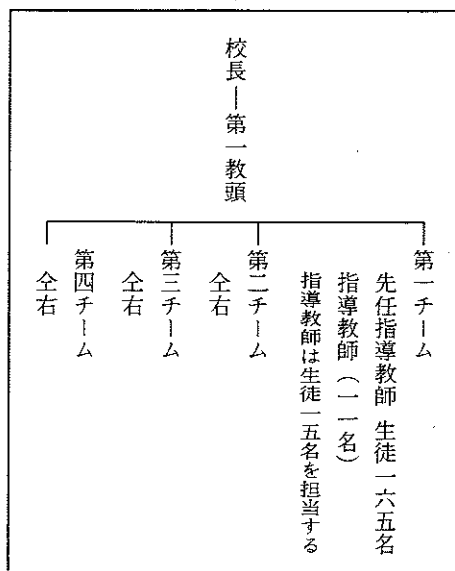
ステイワート女史は第一チームの先任指導教師で、彼女の下にいる一一名の指導教師は、それぞれ生徒一五名宛を担当し、その指導に万善を期している。彼女の任務は次の二つに大別することができる。

第一は、既に述べたように第一チームの指導全般(学習指導、生徒指導の全面、進学就職等を含む)の責任者である。

第二は、このカレッジにその生徒をおくる、グラマー・スクール(

第16表

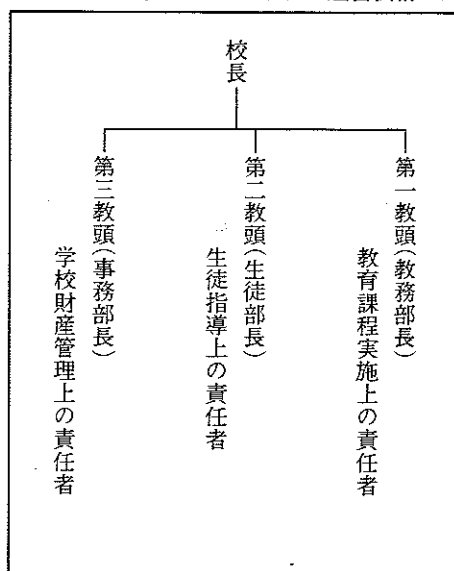
シックス・フォーム・カレッジの運営機構 (2)



注. Ibid: P. 113

第15表

シックス・フォーム・カレッジの運営機構 (1)



当、シックス・フォーム・カレッジは教職員  
51名(事務職員を除く)生徒 660名

[注] E. Macfarlane : Sixth-Form colleges  
1978. P. 109

このカレッジでは主としてその生徒をおくる二校)との連絡責任者である。この連絡責任者としての任務から述べることにする。

#### 五年級生徒の予備調査

先任指導教師は新しい生徒が入学する六か月も前から、新学期(九月)入学してくる生徒の調査にとりかかる。第一回の面接は五年級の春の学期のはじめから全員に会うことにしている。

彼女は「シックス・フォーム・カレッジ」の目的をやさしく解説する。「カレッジはその生徒全員をその職業生活においても、その趣味の生活においても、より幸福に、より満足した、より充実した成人に育てたいと望んでいる。Oレベルをいくらとつていようが、たとえていなくても、そんなことは問題ではありません。すべての生徒が入学してくるよう希望しています」(注4)と呼びかける(従来は一一歳余試験で上位となり、グラマー・スクールの五年級でOレベルを五教科程度とつた者が、六年級に進むことができたとされていた)。そして、生徒たちが入学して後のOレベルのとり方、Oレベルをとっている者はAレベルのとり方、CSEのとり方、以上は試験のある教科であるが、その他の「一般教養教科」にどんなものがあるか、レクレーション、スポーツ、その他生徒活動などについて詳細な資料をそえて解説する。次に個人別に調査し、個人票に興味ある方向、将来の希望、スポーツ等について記入する。調査に要する時間は彼女の時間表(第17表)の、火曜と水曜の午後、金曜の午前中が当ててある。生徒たちへの説明が終って後に両親への説明会がもたれる。五年級の夏の試験(Oレベル)が終って後、その成績が個人別に記入される。五年級担任

の推せん事項も記入される。

ステイワート女史は生徒たちに伝えたいことは、四月までに全部終った。入学予定者全員の教育課程についても、全部同意を得て記録し終った。次は生徒の希望をもとにして、教科の組合せを考えて時間表の作成をはじめ。この外に入学希望者は独立学校や移住者の父母から相談がある。この数は一五名内外である。二つのグラマー・スクールから七〇名の生徒が入学する予定である。合計八五名前後の新入生が九月の新学期第一チームに加わり、先任指導教師ステイワート女史の監督下に入り、指導教師のもとに配属されることになる。<sup>(註)</sup>(生徒の教育課程のとり方については別項で述べる)。

### 第一チームの監督責任者

ステイワート女史は第一チームの監督責任者として生徒の入学を推せんし、生徒の教育課程の決定にいろいろと忠告する。生徒の父母に対しては学校側の責任者となり、生徒の在学中はどんな危機にあつても免倒をみる。卒業後の就職については情報を提供し、進学に当つては推せん状を書く。指導教師一名と生徒一六五名の全般についての責任者である。

### 職員会議

新学期が発足する前に職員会議を何回となく開き、新一年生の受入れについて協議し、万善を期す。新二年生については最後の段階を迎える準備の年として打合せを緊密にする。新任教師がおればこの一年間は見習いの年として老練の教師にその指導を一任しておく。

第一チームの指導力を強化するためには、第一に指導教師間の連絡を緊密にすることが肝要である。全教師が学校のあらゆる規則、即学校規則、各種の報告等について熟知するよう配慮する。第二、先任指導教師たるステイワート女史が自ら指導教師一人一人と話し合い、また直接生徒と話し合い、問題を事前に解決することにつとめる。

彼女は第17表の通り歴史を担当し、Aレベル歴史一年六時間、二年三時間、一般教養としての地方社会史四時間、現代政治二時間、合計一五時間、その他に二つのグラマー・スクール五年級生徒との面接がある。

### (5) 指導教師の任務と時間表

マーチン・バニスターはこのカレッジで地理学と環境学を教えている。このカレッジは彼の第二番目の勤務校である。その前はグラマー・スクールに勤めていた。そのグラマー・スクールは彼が就職した翌年、近くのモダーン・スクールと合併して総合制中等学校となった。

彼は以前のグラマー・スクールと現在のこの「シックス・フォーム・カレッジ」の生活と比較してみる。そのちがいは学校が教師に課している要求のちがいだと考えている。一一歳から一八歳まで教育する総合制中等学校では、教師としての彼の神経はとことんまで疲れはてる。彼は一日中心が安まることはない。学期のはじめであつても彼は一日の終りにはぐったりなつて、宿舎に帰り次第ベットに倒れそうだった。しかしこのカレッジでは夕方になつても、まだエネルギーが残っている。彼に地理学と環境学を教えているが、学習指導の準備としては

第17表

前任指導教師の時間表 (ジャン・ステイワート)

	1	2	3	4	5	6	教科外
月	Aレベル 歴史 2年		一般研究 地方社会史	全 左	Aレベル 歴史 1年		人文学科 教員打合せ 歴史科教員 打合せに
火	一般研究 現代政治学	Aレベル 歴史 1年	Aレベル 歴史 2年				
水		私的研究 監督	Aレベル 歴史 1年	Aレベル 歴史 2年			
木			Aレベル 歴史 1年	校長前任 指導教師会	一般研究 現代政治学	Aレベル 歴史 1年	部教師会 (3週毎)
金	Aレベル 歴史 1年				一般研究 地方社会史		

火曜と水曜の午後、金曜の午前はグラマー、スクール5年級生徒との面接

注. E. Macfarlane: Sixth-Form Colleges. 1978, P. 133

第18表

指導教師の時間表 (マーチン・バニスター)

	1	2	3	4	5	6	7	8
月	Aレベル地 理 2 年		一 般 教 養 環 境 学 研 究					地理と環 境学部会
火	Aレベル環境学 研究 1年		一 般 教 養 環 境 学 研 究			集団指導	CEE地理	
水	Oレベル環境学 研究		Aレベル環境学 研究				Aレベル地理	
木	図 書 館 監 督		地 理 一 般 教 養			一 般 教 養 環 境 学 研 究		
金	Oレベル環境学 研究				CEE 地 理	CEE 地 理	Aレベル環境学 研究 1年	

CEEはSCEの延長、1時間は45分

注. E. Macfarlane: Sixth-Form Colleges, P 148



前の学校時代よりもうんと時間をかけている。一六一・一九歳の生徒たちは一つのテーマを通して自分の一つの考えだけを追求している。

生徒はもう大人になっていて、特殊の問題については特に知的に生徒の要求に答えてくれるよう期待している。成績もよい結果かとれるよう期待している。また試験のない教科一般教養教科、スポーツにも関心が深い。彼のAレベルの地理学では生徒は退屈しているが、一般教養教科である環境学研究では活発である。このカレッジでは生徒たちは週二時間の一般教養教科を二つか三つとっている者が多い。

マーチンは一人一人の生徒と親しくなることを楽しんでいる。彼の学校の教科は個人指導教師として、一三名か一四名の生徒の指導を受け持っている。これらの生徒の性格、家庭環境、友人関係等について知れば知るほど、彼等の助言者としての地位が高まるのをひしひしと感じてくる。一六歳や一七歳の青年は困難にぶつかった時、自分の力で解決するには余りにも経験が貧弱である。指導教師はこんな時味方として百万人力を発揮せねばならぬ立場にある。彼はいわば医師であり教育心理学者でもある。マーチンの担当する一三名の生徒との集団指導の時間は、火曜日の六時間目(四五分間)とつてある。第18表はマーチンの一週間の時間表である。地理学Aレベル四時間、環境学Aレベル、六時間、Oレベル、四時間、一般教養教科の環境学研究、九時間等、合計三〇時間、その外に担当生徒の集団指導(火曜日の第六時限)、聖歌隊指導(火曜日の課外)、図書館監督(木曜日第一・二校時)第四時間を担当している。<sup>(注46)</sup>

## (6) 六年級教育課程の事例研究

### ピーター(男子生徒)

#### 入学前の調査

彼はグラマー・スクール時代は優秀組にいて、一五歳の誕生日にはもう六年級に在学していた。彼は天才とまではいえないが、知的にすぐれ、読書・音楽・スポーツ等に趣味も広く、その他科学的な問題に興味を示していた。彼は将来の職業として科学的な会計士になりたいと考えていた。彼は教科外活動には関係していなかったが、彼の同僚達に人気があつて監督生徒をつとめていた。学校生活外でも彼は多方面の趣味をもっていたが、その上アルバイトも引きうけていた。

彼はGCEは四年でOレベルの英語をとり、五年では一一教科もとてり、宗教をおとしたのみであつた。両親は彼がAレベルを四教科とすることを期待し、学校側も彼がうまく処理できるであろうと考えていた。彼は「一般教養教科」にも興味をもち、教科を制限しようとは考えていなかった。さて、どの教科を続け、どの教科をやめたらよいか、彼は次の結論に達した、即純粋数学、応用数学、経済学、物理学、化学、歴史の中から、Aレベルを三教科又は四教科選ぶというのである。

次に一般教養教科としての経済学、環境学、政治学、応用数学、物理学、宗教の哲学、社会学の中から二教科又は三教科選ぶこととした。<sup>(注47)</sup>ゲームはホッケーにきめた。

### 一・二年の学習

彼がこのカレッジに入学して後の学習のすすめ方は左の通りである。

Aレベル学習—純粹数学、応用数学、物理学（以上は一年、二年になるとこの上に「数学増科を加える（四教科となる）」

一般教養教科—経済学、商品管理学、宗教の哲学と社会学（以上は一年）、政治学、商品学（以上は二年）

体育レクレーション—ホッケー

ピーターのこのAレベルの教科のとり方は、グラマー・スクールの科学科の生徒の教科の組合せそっくりである。彼の一般教養教科のとり方も第一年は総時間の三分の一（二時間）をあて、第二年は五分の一（七時間程度）をあてていた。彼は研究教科の幅を広くしたいと考え、数学以外に興味ある問題を追求した。

彼の一般教養教科の研究は彼の時間割に変化を与えただけではなく、試験のある教科にも大変役立った。彼の時間割は均斉がとれている。

大学入学のための教育としても、また資格としても充分だと思われる。<sup>(注48)</sup>

## 二年後の成績

最初から予想されたように、ピーターは全く非の打ちどころのない生徒で、学習は予定通り進行し、その上ホッケーはカレッジ代表の選手となり、社会クラブの委員長をつとめ、討論協会の活動では才気にみちた一員であった。しかし彼は遠慮深く気どることもなかった。それ故教師の中でも彼を低く評価している人もいた。彼はそんな圧力にも拘らず、自身の力で着々と四つのAレベルを獲得した。その上一般教養教科にも興味をもって研究を続けた。彼が最初に選んだ大学は最もよい条件で彼を迎えてくれることを決定した。<sup>(注49)</sup>

## ジャン（女子生徒）

### 入学前の調査

ジャンがこの総合制カレッジに入学許可を求めてきた時には、彼女は将来の職業として家庭科又は体育の教師になりたいと主張していた。彼女は体育では熱心な競技者ではあったが、特に何かが傑出していたのではない。学業成績も同様であった。彼女はCSEに同じ、七課目を一三の成績で通過していた（CSEの成績は最もよいが一で、これはGCEのOレベル通過程度のよい成績である）。二科目はGCEのOレベルを受験し、家庭科は通過し、数学はおちてしまった。

彼女を教えた教師たちは教員養成カレッジに入学するための資格をとることは困難かも知れないが、保育関係の職業につくことは可能かも知れないということだった。

彼女はOレベル四教科（英語、英文学、経済学、女子のための数学）とAレベルは一教科（織物と服装）、この外に一般教養課目の中から美術と「教師と児童」（初等学校における教育実習）の中から選択二課目、この外にゲームはネットボール（バスケットボールに似た女子の遊び）と初等学校教師のための特殊課目としての体育をとることにきめていた。<sup>(注50)</sup>

## 一・二年の学習

Aレベル—一教科（織物と服装）

Oレベル—英語、英文学、経済学、女子のための数学（以上は一年）、商業、宗教、女子のための数学（以上は二年）

一般教養教科—美術、教師と児童（以上は一年）、趣味の読書、環

境学研究、家政学（以上は二年）

体育とレクレーション・ネットボール、教師のための体育（以上一年）、ネットボール（以上二年）、

ジャンは決心の固い勉強家で学校側の覚えもよかった。しかし成績はその割に振わず、CSEも広く受験していた。彼女は衣服の製作には特別の能力をもっていて、自分の服は自分でデザインして、裁断して、縫っていた。GCEの裁縫のOレベルは既に通過していた。これで気をよくしてカレッジに入学して、織物と服装のAレベルを決定したのである。しかしこれは「理論」の部では通過困難ではないかと心配されていた。一年の終りに彼女は数学には失敗したが、他のOレベル三つは無事通過した。<sup>（注5）</sup>

彼女は二年目に入ると別のOレベル二教科の学習をはじめ、数学に再度挑戦した。一年時代彼女は小学校の指定学級で「教師と児童」の課程を実習したが、この経験は彼女に大きな自信を与え、教師になろうと決心した。裁縫の教師になろうと志し、体育教師のための課程は中止した。

二年生の終りにジャンは織物と服装のAレベルを通過し、さらにOレベルを二教科も通過した。彼女がとったOレベルの成績は、成績としては最低に近いものであったが、彼女はこの二年間を通じ、新しい「シックス・フォーム」生徒のよい代表者といえる人物であった（モダーン・スクールでGCEのOレベルを一つか二つとただで入学した生徒の中の成功者としての代表者の意味）。

ジャンがこのカレッジに入学した頃、教員養成カレッジへの入学資格がとれるかどうか心配されていた。しかし子どもたちと一緒に勉強

してみると万事順調に進行し、教師となることが最もよい職業ではないかと思われ、そう思いこむや彼女は小学校における経験がこのカレッジの生活を楽しいものにした。彼女が訪問した学校が思いがけなくも彼女を学問する方向に押しやり、彼女はその刺激に特に反応したことになる。彼女は小学校の子どもたちと仲よくなり、子どもたちは彼女の人なつっこい快活な性格に親しみをもっていた。彼女が学校訪問から帰ってきて後の討論で、彼女は子どもたちがある要求に対し、或はいろいろな社会的問題に対し反応する状態を、詳細に解説してくれたが、それは恰かも魚が水を得たようないきいきした姿であった。結局ジャンが教えたいと決心したのは小学校時代の子どもたちで、彼女がそこに教育の場を見つけることに今や何らの困難もなかった。<sup>（注6）</sup>

注:

1. G.C.E.(中等学校修了資格試験)は中等学校生徒に課される試験で、普通試験(Oレベル)と高等試験(Aレベル)の2段階がある。  
池田良三著 イギリスの学校教育、第三章の同項を参照されたい。
2. 全 上
3. H.C. maxwell Lytes: A History of Eton College. 1875. P. 147
4. P.H. Taylor: The English Sixth-Form 1974. P. 8
5. E. D. Laborde: Harrow School. 1948. P. 88
6. M.L. Clarke: Classical Education in Britain, 1500-1900, P. 79
7. Stanley's Life of Thomas Arnold. Head-Master of Rugby. 1901. P. 118 P. 123. P. 221
8. Ibid: P. 488
9. 池田良三: イギリスの学校教育、第1章、ハロー・スクールの教育法、P. 74.  
学校規則の制定権の項参照されたい。
10. Laborde: P. 63-4
11. W. K. Richmond: Education in Britain Since 1944. 1978. P. 25
12. E. Dewey: The Dalton Laboratory Plan. 1922. PP. 67-75
13. Ibid: P. 11-45
14. E. M. Haggitt: Projects in the Primary School. 1975
15. Ibid: PP. Ⅷ-Ⅸ
16. Ibid: P. 30-37
17. 池田良三: イギリスの学校教育、P. 29. 宗教教育の項
18. 大柴 衛: イギリスの学校 (昭和39年発行) PP. 30-32
19. 奥田真丈: 主要国の学制と教育課程、P. 238
20. 池田良三: イギリスの教育 (9) (宮崎女子短大研究紀要 第5号) マンチエスター  
グラーブ、スカール、PP. 11-3. J. A. Graham: The Manchester School  
1965. PP. 3-8
21. R. Pedley: The Comprehensive School. P. 216
22. R. E. Cross: British Secondary Education. 1965. P.
23. Ibid: P. 144
24. S. T. Curtis: History of Education in Great Britain. 1963. PP. 412-3
25. 池田良三: イギリス教育の伝統と未来、P. 306. P. 307
26. T. Burgess: A Guide to English Schools 1975. PP. 101-3
27. Ibid: P. 162
28. Cross: British Secondary Schools. 1965. PP. 512-522
29. E. Macfarlane: Sixth-Form Colleges. 1978. P. 27
30. Ibid: P. 27
31. 注. 9を参照されたい。
32. Curtis: Crowther Report. PP. 618-628
33. Burgess: P. 75
34. R. Pedley: PP. 56-60
35. Ibid: PP. 84-5
36. Ibid: P. 219
37. Macfarlane. PP. 32-3
38. 池田良三: イギリスの教育 (10) ロンドンの機械、工業研究所
39. Macfarlane: P. 104
40. Ibid: 裏表紙に紹介あり。
41. Ibid: PP. 43-4
42. Ibid: PP. 72-3
43. Ibid: PP. 81-2
44. Ibid: P. 46
45. Ibid: PP. 126-134
46. Ibid: PP. 141-9
47. Ibid: PP. 18-9
48. Ibid: PP. 47-8
49. Ibid: P. 210
50. Ibid: PP. 17-8
51. Ibid: P. 51
52. Ibid: P. 205

## あとがき

「<sup>シックスフォーム</sup>六年級カレッジ」は最も新しいカレッジである。イギリスでは一九四四年教育法以来、「<sup>イレブン・プラス・エグザミネーション</sup>一一歳余試験」の成績で優秀な生徒をグラマール・スクールに入学させ、多数の生徒はモダン・スクールに入学し卒業後は一六歳で就職していた。

この方法に疑問がもたれ、一九六五年の通牒で「<sup>コンプレヘンシブ・スクール</sup>総合制中等学校」に編成がえすることとなった。僅か二〇年後のことである。一六歳以後も学問をしたい希望者が増加するにつれ、最上級の「<sup>シックス・フォーム</sup>六年級」を独立させる計画をすすめて、「シックス・フォーム・カレッジ」の創立が進行している。

このカレッジでは一六歳に達した青年男女に、その能力を自覚的に発展させようとして「解放教科制」をとっている。どの教科を学習するか、それは生徒の選択にまかせている。生徒は将来選択する職業に直結した三教科を選ぶ。生涯教育の基礎づくりである。教師はその上に、三教科を補い人格のバランスをとるための「<sup>ゼネラル・スタディーズ</sup>一般教養教科」について勧告し、スポーツ、レクリエーションについても指導している。教師の指導も行き届いているがその目的は生徒の自発性を誘発することである。このように後期中等教育が充実してこそ、大学教育、教員養成カレッジの教育が完成されるものと考えられる。

次の第13集は、女子のためのカレッジについて調べる予定で資料を集めている。次に私がイギリスの教育について発表した、著書、論文の一覧表を掲げる。

著 書

- 1 イギリス教育の伝統と未来  
トーマス・アーノルドの教育観と実践
- 2 イギリスの学校教育  
チャールズ・ヴォーリンの改革
- 3 イギリスの教育  
シックス・フォーム・カレッジの創立

発行所 ぎょうせい 価 二、〇〇〇円  
発行所 ぎょうせい 価 一、二〇〇円  
(東京都中央区銀座七―四―一二 一〇四)  
発行所 ぎょうせい (価 一、四〇〇円・送料一六〇円)  
(東京都中央区銀座七―四―一二 一〇四)

イギリスの教育

発 表 誌

第1集	パブリック・スクール	イギリス教育の伝統と未来	第二章	昭和四二年 七月
第2集	エドワード・スリング	宮崎女子短大研究紀要	第2号	全 四三 四
第3集	無月謝学校の歴史	イギリス教育の伝統と未来	第1章	全 四四 八
第4集	イトトン・カレッジ	イギリス教育の伝統と未来	第4章	全 四五 一〇
第5集	組合立学校の歴史	未 刊		
第6集	ハロー・スクールの教育	宮崎女子短大研究紀要	第3号	全 四七 二
第7集	勅許状の研究	イギリスの学校教育	第1章	全 四八 二
第8集	ハロー・スクールの教育	宮崎女子短大研究紀要	第4号	全 四九 二
第9集	チャールズ・ヴォーリンの改革	イギリスの学校教育	第2章	全 四九 一二
第10集	教育課程の研究	全	第3章	
第11集	カレッジの歴史	宮崎女子短大研究紀要	第5号	全 五〇 三
	カレッジの歴史 (2)	シユローズベリーの聖メアリ・カレッジ	第6号	全 五一 三
	カレッジの歴史 (3)	ゴールドスミス・カレッジ	第7号	全 五二 四
	ロンドンのキングズ・カレッジ	宮崎女子短大研究紀要		

第12集

カレッジの歴史 (4)  
シックスフォーム・カレッジ

昭和五四年一月一〇日

宮崎女子短大研究紀要

第8号 全

宮崎女子短期大学教授

住所

〒880

宮崎市大和町一二九一二

電話 ○九八五―二四―一八二六

池田良三